気高く生きる道を選択します

http://hatagaya-saisei-univ.jp

Hatasai Magazine Vol.9

幡ヶ谷再生大学

HATAGAYA RE BIRTH UNIVERSITY

Hatasai Magazine Vol.9

東海・大阪・愛媛・岡山 編

特定非営利活動法人　幡ヶ谷再生大学復興再生部　（23生都管特第1204号）

幡ヶ谷再生大学復興再生部とは？

2006年に仲間内のサークルとして始まった幡ヶ谷再生大学
陸上部や格闘部など、あくまで自分達の人間復興として集まって活動していた。
そんな中2011年3月11日に発生した東日本大震災
日本中、世界中に大きな衝撃と悲しい爪跡を残した。
その復興支援を主な目的とし、その他の危機的な災害が起きた際も
支援出来る非営利団体としてこの度新たに復興再生部を開校する。

幡ヶ谷再生大学復興再生部　部長　TOSHI-LOW

VISION（目的）

2011年3月11日に発生した「東日本大震災」
その被害をうけてしまった地域の子供達の未来構築を軸にそれに関わる全ての復興支援を目的とし活動する事。
また、その他予期せぬ危機的事態が発生した際は状況下に応じて対応していく事。

MISSION（使命）

身体的、精神的にも被害をうけてしまった子供達への明るい未来を構築していく事。
単発的なサポートではなく、長期を見越して復興への活動のサポートをしていく事。
幡ヶ谷再生大学の定義に則り、遊び心を忘れずに人間再生と被災地の復興を行っていく事。

CLARITY（明確さ）

当団体の役員は報酬や利益は一切受けず、全てを災害の復興支援に使用する事。
あくまで直接的に行動する事を前提に行動、リサーチし、他団体、自治体とも連携しあって明確なサポートをしていく事。
活動予定、活動結果を随時報告する事。

特定非営利活動法人　幡ヶ谷再生大学復興再生部　（23生都管特第1204号）

幡ヶ谷再生大学 他学部紹介

私たち、幡ヶ谷再生大学では復興再生部以外にも学部を併設しています。
あくまでも自分達以外の人間復興を軸に立ち上げた
サークル活動ですので、基本概念に変わりはありません。
その中で、私達の意思にご賛同頂いた方々と共に
その他サークル活動も共有できたらと思っています。
陸上部、及び農学部に関しては頻繁に募集を行っています。
詳細はそれぞれのWebやTwitterなどをご確認ください。

陸上部

https://twitter.com/rebirth_rikujyo

格闘部

東京木曜会
TOKYO THURSDAY JU-JITSU

山岳部

音楽部

農学部

https://twitter.com/nougakubu

読書部

手芸部

二輪部

映像部

けん玉倶楽部

幡ヶ谷再生大学
けん玉倶楽部

hatagaya-saisei-univ.jp

主　な　活　動　履　歴

2011	03/17～19	tactics recordsおよび水戸の仲間たちによって北茨城・いわき・高萩へ支援物資の募集と運搬（飲料水は岩手県宮古市へ）
	03/29～04/05	避難所に直接物資を届けている札幌のハードコアバンドSLANG KO氏に託すために子どもたちへのおやつを募集。BRAHMANのメンバーによる岩手県宮古市へ運搬
	05/12～22	「オペレーション米騒動」岩手県・宮城県支援物資の募集。集まったお米、約10トン
	08/01～13	作戦コード「H2O」福島県南相馬市への支援物資（飲料水・お菓子・米・レトルト食品・保存食品）の募集。集まった飲料水、約25トン。「幡ヶ谷再生大学　南相馬キャンパス」LIVE前に支援物資受け入れ先の南相馬市「きっずくらぶ」へBRAHMANメンバー、スタッフ、茨城県、福島県の仲間により運搬
	11/11	NPO（特定非営利活動）法人 幡ヶ谷再生大学復興再生部（23生都管特第1204号）取得
	12/11～24	作戦コード「SMS」岩手県、宮城県、福島県への支援物資（お餅）の募集。集まったお餅、約7.5トン。茨城県、福島県の仲間によるNBC作戦の募集場所に運搬
2012	03/11	幡ヶ谷再生大学 開校
	04/12～05/11	宮城県石巻市小渕浜（牡鹿半島）にてワカメ収穫作業の生徒募集及び派遣
	04/30・06/10	「首長恐竜の親子3体像展示」イベント（6月17日～7月1日）会場になる宮城県石巻市のみなと荘園庭に残る津波漂流物やガラス片撤去と清掃・整地作業
	05/13	竜巻被害にあった茨城県つくば市北条にて瓦礫撤去作業
	06/17～7/01	宮城県石巻市のみなと荘にて「首長恐竜の親子3体像展示」イベント開催
	09/15～16	東北AIR JAM 2012　幡ヶ谷再生大学 復興再生部 ブース初出展
	09/17～11/04	宮城県石巻市「大街道子供広場作り」全3回
2013	02/07	幡ヶ谷再生大学 読書部として宮城県石巻市立湊小学校にて全学年1クラスずつ読み聞かせを実施
	02/25	仙台市立蒲町小学校にて、特別講師として「生きる」ということをテーマに授業を開催。未だ仮設の校舎のなか、元気で真摯な子供たちの姿は再生大メンバーにとって非常に勉強になる講義となる
	04/29	宮城県・小渕浜子供広場作りに着手
	07/07	幡ヶ谷再生大学 読書部として穀町幼稚園、ふたば保育園にて読み聞かせを実施
	08/10～11	幡ヶ谷再生大学 復興再生部　SUMMER SONIC 2013東北復興PROJECT「音遊海岸」にブース出展
	12/05	幡ヶ谷再生大学 読書部として石巻市大原小学校全校生徒に読み聞かせ
2014	01/11	小渕浜子供広場完成（全13回）
	04/29	小渕浜子供広場お披露目会　地元の大原小の児童らによる獅子振りや空手の演武、ミュージシャンの演奏に合わせた地元の住民による歌などを披露

	05/21～06/21	BRAHMAN Tour 1080°全会場に幡ヶ谷再生大学復興再生部ブースを出展
	08/06～2015/07/05	いわき・生木葉ファームでの農作業と勉強会（放射線基礎講座 計2回）1回～7回
	08/16～17	幡ヶ谷再生大学 復興再生部　SUMMER SONIC 2014東北復興PROJECT「音遊海岸」にブース出展、大阪にも初出展
	12/03	津波被害の大きかった閖上近くの仙台市東四郎丸小学校6年生の授業で「生きる」をテーマに特別講師として参加
2015	03/11	幡ヶ谷再生大学映像記録「鼎の問」DVD発売
	04/04	猪苗代野外音楽堂建設に向けた天神浜清掃
	05/13～14	猪苗代野外音楽堂オープンのための音開き用ソーラーパネル設置作業　以降、毎年幡再でお手伝い
	08/09,09/14,10/25	幡ヶ谷再生大学 公開講座開催　第1,2,3回
	09/15～2017/07/22	東日本豪雨災害・常総市支援活動第1回～第25回　大雨被害にあった茨城県常総市にて浸水した民家の泥かきや家具の運び出し等のお手伝い、若宮戸・石塚さん宅作業、浸水した米農家さんと蕎麦屋さんの片付け、近隣のお宅の土嚢撤去、お墓の泥出しや掃除、自動車工場やご自宅の泥出しや片付け
	10/03～04	ブルーベリー農家さんの畑とハウス内泥出し、整地、土嚢撤去など
	11/01	Tシャツプリント工場にて浸水したTシャツの片付け、仕分け、洗濯など（Tシャツ再生大作戦の立ち上げ）
	11/07	猪苗代野外音楽堂 音仕舞い ソーラーパネル撤収作業　以降、毎年幡再でお手伝い
2016	02/13～14	沖縄アサイラム（ブース出展、特別公開講座）
	02/15	辺野古、じんぶん学校、高江訪問
	04/20	幡ヶ谷再生大学 復興再生部 熊本入り
	05/01	茨城県常総市災害復興支援イベント「Dappe Rock's」にてブース出展
	05/29	常総若宮戸石塚さん宅作業FINAL
	06/02	BRAHMAN「幡ヶ谷再生大学 熊本キャンパス」@熊本NAVARO
	06/03	幡ヶ谷再生大学 読書部として、りょうさんが熊本県大津町立護川小学校と大津北小学校に読み聞かせ・同日、学長、南阿蘇避難所にて弾き語り
	06/11～	現在も進行中 熊本地震により熊本県・南阿蘇村、嘉島町、熊本市内、大津町、西原村、益城町にて瓦礫撤去、屋根のブルーシート掛け、農地や集落・通学路の草刈り、解体前納屋や倉庫片付け、古民家片付け、神社片付け、自然農の和子さんの茶摘み・草取り・田植え・種まき・稲刈り、のはら農研塾にて農作業、子供たちとお菓子作り、学校キャンプ、子供会、語りべのお手伝い、語りべバスツアー、食にまつわるワークショップ、など仮設住宅への引越しなど
	07/04～05	片平里菜さん、益城町立飯野小で弾き語り・南阿蘇西小、南阿蘇の避難所で弾き語り
	09/11～2017/04/02	東日本豪雨災害・常総市支援活動第22回~24回
	09/15	ORANGE RANGE東海大熊本キャンパスにてライブ
	11/03～11/12	阿蘇山噴火火山灰被害による果実園での火山灰撤去、果実洗浄作業

	11/05	岩手県・大船渡FREAKS 常総Tシャツ洗濯作業
	11/12	阿蘇山噴火被害による果実園作業
	11/23	宮城県・石巻南境 正月飾り作り
	12/10	幡ヶ谷再生大学 公開講座開催 第4回
	12/24	熊本県・南阿蘇村での熊本地震案内語りベツアー
	12/31～	石井麻木写真展・広島県
2017	01/02-06～12/8-10	石井麻木写真展・広島県、東京都・新宿区、福島空港、宮城県、福岡県、岩手県、大阪府、宮崎県、福島県・喜多方での設営・撤去のお手伝い
	03/19・04/19	大船渡KESEN ROCK FREAKS 常総Tシャツ防音内装作業・木札取り付け作業
	05/02・04・06～07	熊本県・垂玉温泉「山口旅館」片付けのお手伝い
	05/19	福島県・猪苗代野外音楽堂 音開きソーラー設置作業
	07/01	宮城県・小渕浜みかん公園 パネル補強と側溝補修、草取り
	07/07～	現在も進行中 九州北部豪雨・福岡県朝倉市での活動 第1回-93回 九州北部で発生した集中豪雨被害により被災した福岡県朝倉市の比良松地区、黒川地区、上須川地区、山田地区、などで家屋や納屋、倉庫、蔵、庭の泥出し、片付け。稲刈りが円滑に進むよう田んぼの流木や木っ端出し。梨畑と柿畑の泥出し、流木や木っ端の撤去による復旧作業。 柿畑から出た流木を「東北ライブハウス大作戦」木札に→『木札with a mission』開始
	07/08・21・23	福島県・猪苗代野外音楽堂 装飾・設営作業・ソーラー積み込み作業・荷降ろし作業
	07/13・08/13・ 09/17・10/02	岩手県・岩泉町視察
	07/22	東日本豪雨災害・常総市支援活動第25回 Tシャツ工場FINAL
	08/24	熊本県・大津護川小子供会
	09/10	宮城県・小渕浜みかん公園大運動会
	10/09～	現在も進行中　台風第10号災害による岩手県・岩泉町での流木を活用した薪割りお手伝いなど復旧活動 第1回-4回
	11/12	宮城県・小渕浜みかん公園 遊具解体と公園整備
	11/19	小渕浜みかん公園終了
	12/10	熊本県・南阿蘇「食のワークショップ」開催
2018	01/13～14	福岡県朝倉市にて小型車両系建設機械講習会を開催
	02/09	『木札with a mission』BRAHMAN武道館 朝倉木札
	02/17～25	「石井麻木写真展」姫路 設営・物販・撤収お手伝い
	03/11	ASYLUM 2018in Fukushima at いわき 振る舞いご飯作り
	04/15	『木札with a mission』GAMADASE KUMAMOTO 朝倉木札
	04/16	熊本県・南阿蘇での熊本地震語りべ&案内
	05/07～06/20	『木札with a mission』MONOEYES Mexican Stand Off Tour 小渕木札

	06/03	小渕浜みかん公園閉園式
	07/06～	現在休止中　「大阪自主練」として始動　大阪府北部地震・大阪府茨木市での活動。平成30年6月に発生した地震により被災した茨木市や大阪市東住吉区を中心に破損した屋根にブルーシートをかける作業、瓦礫の撤去、家屋の補修、リフォームに伴う片付けや掃除などの復旧活動
	07/10～	西日本豪雨・岡山県真備町や芳賀での活動 第1回-39回。平成30年7月豪雨により被災した真備町と芳賀にて家屋や納屋、倉庫、蔵、庭の泥出し、片付け、リフォームに伴う片付けや掃除、桃畑の再生などの復旧活動
	07/12～	現在も進行中　「東海自主練」として始動　岐阜県関市上之保地区での活動。平成30年7月豪雨による津保川が氾濫で被災した関市上之保地区にて家屋の泥出し・片付け、水車の修理、お庭の整備などの復旧活動。
	07/12～17	「石井麻木写真展」札幌　設営撤収お手伝い
	07/14～15	『木札with a mission』KESEN ROCK FESTIVAL 朝倉木札
	07/23	沖縄にて平良啓子さんによる対馬丸事件の体験談お話し会(第5回公開講座)
	08/23～	現在も進行中　西日本豪雨・愛媛県吉田町での活動 第1回-13回 平成30年7月豪雨により被災した吉田町玉津で家屋や倉庫の泥出し、片付け。みかんの摘果、収穫、選果。みかん山園地の泥出し、土嚢積み、土嚢作りなどの復旧作業
	09/02	第2回宮城県・小渕浜みかん公園大運動会(石巻市立・大原小学校にて開催)
	09/08～09	『木札with a mission』風とロック芋煮会 小渕木札
	09/09	『木札with a mission』AIRJAM 朝倉・小渕木札
	09/18～25	「石井麻木写真展」盛岡　設営撤収お手伝い
	09/22～23	『木札with a mission』山人音楽祭 朝倉木札
	10/04～10	『木札with a mission』relationship FRANCE tour 小渕木札
	10/06～07	『木札with a mission』気仙沼サンマフェスティバル 朝倉・小渕木札
	11/13～18	「石井麻木写真展 」神戸　設営撤収お手伝い
	11/16～18	『木札with a mission』狼甲子園 朝倉・小渕木札
2019	02/03～16	「石井麻木写真展」新宿　設営撤収お手伝い
	03/09・03/10・03/17	熊本県南阿蘇・野焼き
	03/11	福島県・富岡町でのスタディーツアー
	04/06	東京にて 第6回公開講座「やんばる高江石原家から見た日本、沖縄のこと」
	04/13	『木札with a mission』テレビズナイト019 朝倉・小渕木札
	04/14	沖縄スタディーツアー
	05/03～06	『木札with a mission』VIVA LA ROCK 朝倉・小渕木札
	05/11～12	『木札with a mission』宮古島ロックフェスティバル 朝倉・小渕木札
	05/31	沖縄にて戦跡基地フィールドワーク
	06/09	愛媛県吉田町第13回　土嚢作り&トーキョータナカさんの東京田中亭presents BBQ開催

	06/30	いわき生木葉ファームにていわき在来種さと豆植え
	08/12	ISHINOMAKI BUCHI ROCK 小渕浜みかん公園写真展
	08/30	令和元年8月九州北部大雨災害・佐賀県での支援活動
	09/06～09/08	新見市令和元年9月集中豪雨災害支援活動第1回～第3回 翌日以降「岡山自主練(旧真備自主練)」で引き継ぎ活動継続、現在も進行中
	09/14～2020/01/03	現在も進行中　令和元年台風第15号災害・千葉県鋸南町での支援活動　1～30回
	09/24～30	石井麻木写真展 岐阜 設営撤収お手伝い
	10/16～20	現在も進行中　令和元年台風第19号災害・茨城県水戸市での支援活動　1～3回
	10/26	令和元年台風第19号災害・福島県いわき市小川での支援活動
	11/02～2020/03/18	現在も進行中　令和元年台風第19号災害・長野県長野市での支援活動　1～20回
	11/15	令和元年台風第19号災害・石巻BLUE RESISTANCEでの防音材(布団)の補修作業
	12/09～10	いわき生木葉ファームにて鶏解体のワークショップ
	12/24	陸前高田スタディーツアー
2020	02/09～3/13	現在も進行中　令和元年台風第19号災害・栃木県矢板市での支援活動　1～6回
	04/22	全国27医療機関にマスク寄贈① 20,195枚
	04/30	全国19医療機関にマスク寄贈② 15,000枚
	05/19	ビニールガウン作成全国自主練内で募集開始
	06/06	ビニールガウン 東京都済生会中央病院へ納品① 1,150着
	06/24	マスク・医療キャップ等 埼玉三愛病院へ納品
	06/30	ビニールガウン 東京都済生会中央病院へ納品② 694着
	07/06～13	令和2年7月豪雨災害・熊本芦北町 第1～6回
	07/26～27	長野県から熊本県へ重機移送　往路
	08/22～24	熊本県からダンプ返送　復路
	09/29	幡ヶ谷再生大学公開講座7 ネット配信1《災害と地方再生》
	10/22	幡ヶ谷再生大学公開講座8 ネット配信2《生命と食と農、環境と地域再生》
	11/19	幡ヶ谷再生大学公開講座9 ネット配信3《次世代のおもしろテクノロジー》

※ 石巻南境、岩泉、福島、愛媛、大阪、九州、東海、岡山、長野、関東など各地で「自主練」として継続中(P.82～)
主な活動履歴を掲載しています。詳しくは幡ヶ谷再生大学webにて詳細がご覧になれます。http://hatagaya-saisei-univ.jp

「平成30年7月豪雨」支援活動
東海編

01 東海

岐阜（関市）

直近の人口：88,799名
死者・行方不明・負傷者：2名
避難者数：1,150名
ボランティア：約7,000名

（参考資料）
平成30年7月豪雨（関市役所）：
http://www.city.seki.lg.jp/category/6-0-0-0-0.html
平成30年7月豪雨災害検証報告書（案）（関市役所）：
http://www.city.seki.lg.jp/cmsfiles/contents/0000013/13027/kensyohokoku.pdf
平成30年7月豪雨（内閣府）：
http://www.bousai.go.jp/updates/h30typhoon7/pdf/310109_1700_h30typhoon7_01.pdf

2018年6月28日から7月8日にかけて、台風7号および梅雨前線等の影響により西日本を中心に全国的に広い範囲で集中豪雨が襲い、甚大な爪痕を残しました。
幡ヶ谷再生大学は発生直後から現地入りし、被害に遭われた方たちとともに活動を行いました。
災害当時の様子、ともに過ごした日々、現在もつづく活動について話していただきました。

「幡ヶ谷再生大学には、人と人との繋がりを改めて教えてもらった気がします」

林 剛
愛知県出身
／愛知県在住
美岳小屋オーナー

現在、幡ヶ谷再生大学「東海自主練」の活動拠点になっている「美岳小屋（みたけごや）」のオーナーを務める林さん。
消防士を辞め、農家に転職したきっかけ。幡ヶ谷再生大学との出会いから、現在まで。
食べた人から絶賛される『きぼうのいちご』の過程を訊きました。

――2018年に起きた「平成30年7月豪雨」の災害直後の状況を教えてください。

僕の家は高台にあるので、近所でも被害なかったです。

――幡ヶ谷再生大学との出会いはどのようなものだったのでしょうか。

BRAHMANを知っていたので、幡再の存在も知っていました。でも活動に参加したわけではなかったので、実際は「活動内容は分からない」というイメージでしたね。

愛知県で『森、道、市場』というイベントが開催され、友人の手伝いで行くことになりました。そこで熊本のオーガニック農家『のはら農研塾』の野原さん（Hatasai Magazine Vol.7 P.82）がいることを知っていましたので、直接会いに行きました。

――積極的ですね（笑）。野原さんとは知り合いではなかったんですね。

自分も農業をするので、一方的に知っていました。お会いするのは初めてで、すごく親身に話を聞いてくださいました。農業に対する想いを話したら「そういう想いを持ってやっているんだったら一緒にやっていこうぜ」とも言ってもらえました。

その後も気にかけてもらい、ちょくちょく連絡を取らせてもらっていて、何カ月か経ったある日、野原さんから「幡再って知ってる？」と聞かれました。

SNSで野原さんたちが幡再と一緒に動いているのを知っていたので、「林くんに紹介したい人がいるんだけど」と声をかけてもらいました。でも、「中途半端に繋がるんだったら、繋げることはできないけど」と釘を刺されながらも「本気でやるなら紹介するよ」と。

――それが南阿蘇で幡再に参加していた愛知在住の塚本さん（Hatasai Magazine Vol.7 P.45）だったんですね。

そうですね。

自分のやっている農業は直売ですし、作物をつくる手間もすごくかかるし、仲間もいません。作業はつねに妻と二人やっていました。格好よく言えば、「孤独との戦い」なんです。でも、「幡再のような想いを持って一緒にやってくれるなら」と思い、野原さんから塚本さんの連絡先を聞いて、幡再と一緒に活動することになりました。

――活動初日はどのような作業をしたのでしょうか。

その前に「まず会いましょう」となりました。その日は夕方で、雨が降っていて、来られた方全員が幡再の黒のマウンテンパーカーを着ていたんですよね。

僕の家族も「真っ黒い人たちが来た」と少し怯えていて…（笑）

――それは怖いですね（笑）。

はい（笑）。幡再の存在は知っていても、どういう人たちかまでは分からないじゃないですか（笑）。そんなとき、塚本さんが幡再について丁寧に説明してくれました。

自分たちのやっている農業に対しての考え方ですとか、無農薬の農業に興味を持ってくれていることが純粋にうれしかったですね。

特に興味を惹かれたのは、単純に自分たちの農作業を手伝うだけではなくて、これからやって来るかもしれない災害に対し、「備える活動をしませんか？」ということでした。

これまで幡再は、被災された地域で復興支援活動をしてこられたわけですよね？

塚本さんから「被災してないエリアだからこそ、やりたい」とも言ってくださって、すごく心が動かされました。東海地方の人間は、その大多数が子供のころからずっと「南海トラフ巨大地震」の恐怖を教え込まれてきましたから…。

それに自分の前職が救命救助隊ということもありましたので、「ぜひ一緒にやっていきましょう」と思えました。

――そもそもどうして通常の農業ではなく、無農薬農業にこだわっているのでしょうか。

僕のおじいちゃんはいわゆる「普通の農業」をやっていました。その過程にとても違和感を覚えたというのがあると思います。

――というと？

農業って本来、自然に対してアプローチするものだと思っていて。だけど、おじいちゃんがやっていた農業は「この時期に、この農薬をこれだけの分量を使っていかに人の手を動かさずに効率よく育てていくか」というものでした。

それがとても「工業的」というか「機械的」に思えてしまって…。

「あの人が作った野菜」と聞かされても、どうしても「取り扱い説明書通りに作ってない？」と思えてしまったんですよね。

自分でやるのなら、「断固無農薬」というわけではなく、これまで教科書がなかった"無農薬のイチゴ"にチャレンジしてみたかったんです。それに、イチゴ自体がとても難易度の高い果実ということもありました。

工業的ではなく、「人間らしいイチゴを育てたい」という想いが一番強かったですね。

――なぜそこまでハードルを上げたのでしょうか。

以前、自分は10年間消防の救助隊に所属していました。それこそ2011年の東北にも発生から3日後に現地に入り、活動していました。

生と死の狭間で仕事をしてきた自分が、教科書通りの農業をやっていくことに、どこか違和感を覚えていたこともあって、より困難な「無農薬のイチゴを作りたい」と考えるようになりました。

教科書に載っていないことをやりたかったですし…そうでなければ、モチベーションも続かなかったように感じます。

――その環境から、どうして農業を仕事にしようと考えたのでしょうか。

自分は「おじいちゃん子」で、子どものころはよく一緒に農作業の手伝いをしていました。手伝っていた畑の一角に「自分のゾーン」があって、そこで育てた野菜を食べた大人たちが「美味しい」と言っていたんですよ。

「それ、素人の自分が作った野菜だよ？ プロの農家のおじいちゃんと同じ味を出せるわけがないから、同じように美味しいはずないじゃん」と失望しました。

失望というか「そんなもんなんだ」と落胆しました。もし自分が作るのなら「"その人"らしいイチゴ」というか「オンリーワン」みたいな作物を作りたかったんです。

かっこよく言えば、挑戦状みたいな感覚で始めました。

――実際、イチゴを作ってみてどうでしたか？

全然ダメでした（笑）独学でイチゴを学び、頭では「やれる」と手応えはあったんですよね。でも、実際やるとまったく別物でした。

「こうじゃなかった」とか、自分が描いた理想とどんどん乖離（かいり）していって…。時間がまったく足りなかったですし、ネガティブなことばかり考えるようになっていましたね。

ですがその反面、落花生は驚くほどうまく育てることができました。落花生で得たお金をイチゴに投入する日々で、いっそのこと辞めようかな…とも考える日々が続きました。

――そんな状況で踏ん張れたのは、何が一番大きかったのでしょうか。

幡再のみなさんのおかげです。本当に幡再の「手」は、"渡りに船"でした。毎回大勢で参加してくれて、言葉や表情に出さないつもりでしたけど、内心はめちゃくちゃうれしかったんです。

みなさんがいなかったら、とっくに心が折れていたと思うんです。毎回10人くらいでイチゴの世話をしてくれ、手が加われば加わるほどイチゴの質もどんどん向上していきました。

幡再生から「美味しい」と言われ、「それはお世辞では？」とか「本当にそんなことあるのかな？」と考えていたのですが、取引先の方からも「美味しくなった」と褒めてもらえて。

「イチゴを育てたい」と考えていたころの初心が戻ってきたように感じました。

――人手が増えるメリットの一方で、デメリットはなかったのでしょうか。

消防の救助隊には"鉄の上下関係"があるんです。なので、僕より年上の方に指示を出すことに違和感はありましたね（笑）。

でも、みなさん真摯に自分の話に耳を傾けてくれますし、ありがたかったです。

まわりの農家さんから「お前のところは良いなー」と羨ましがられるようになりました。

幡再が来る前までは、周辺の農家さんの中には挨拶だけの人もいましたけど、話す機会が増えて協力してできることが増えるようになりました。

自分が子どものころはすでになかった風潮ですが、昔は「畑は人が集まる場所」だったみたいです。

幡再を通じて、まわりの農家さんに「地域に活気が戻ってきた」と言ってもらえたときは心にグッと来るものがありました。

――東海の自主練ではロープワークも活動の一部になっていますね。ロープワークを始められたきっかけはどのようなものだったのでしょうか。

真夏の暑い日に畑に出てもらうのが、忍びなく思っていたんです。「せっかく来てくださるのはありがたいけど、炎天下の中での作業は実際どうなんだろう」と考えていました。そんなある日、塚本さんから「ロープワークを教えていただくことってできませんか？」と提案されたんですよ。

そもそも東海の活動は、「被災してない東海地方でやる幡再の"備える"活動」がコンセプトで、ロープワークは今後の復興支援活動でも使える技術だと。幡再の日々の活動のなかで自分から伝えられるものは農業以外にないなぁと考えていたのですが、そんな流れからロープワークを教えることになりました。

もちろん本業が忙しいときは無理ですけど、塚本さんとも「知識の共有」は良いものだと考えていましたので、上達していくみなさんを見ているとうれしいですよ。

――幡ヶ谷再生大学は現在の林さんにとってどのようなものになっていますか？

野原さんとの繋がりがあって、幡再があります。幡再には人と人との繋がりを改めて教えてもらった気がします。

現在は幡再の活動は生活の一部ですし、幡再のみんなを家族のように思っています。子どもたちも「週末になったら幡再来る？」と聞いてきますよ（笑）。

それに、BRAHMANを聞いた息子が「ドラムをやりたい」と言い出して、必死に練習しているんですよ（笑）。

OAU(BRAHMANのメンバーが中心となったアコースティックバンド）の名古屋公演は家族でチケットを買ってお邪魔しました。活動だけじゃなくて、私生活にも多大な影響を与えてくれる存在です。

だからといって、寄りかかるわけではないですけど、嫌なことや挫けそうになったときは幡再生のみんなの顔が浮かんでくるんです。ほんと不思議ですよね。

「『なにもできなかった…』という気持ちに、どこか後悔していました」

荒井久美
愛知県出身
／愛知県在住
サービス業

2015年9月に発生した「関東・東北豪雨」では幡ヶ谷再生大学の活動現場になった茨城県常総市に足繁く通い、2018年に地元で起きた「平成30年7月豪雨」が発生すると、即座に動いた荒井さん。
幡ヶ谷再生大学と過ごした日々を振り返ってもらいました。

――2018年に起きた「平成30年7月豪雨」の災害直後の状況を教えてください。

我が家はそこまで被害を受けなかったのですが、親の実家がある岐阜県が心配になりました。20年前の2000年に「東海豪雨」があり、あのときの状況を思い出してしまって…。

――20年前はどのような状況だったのでしょうか。

実家のある岐阜は、私が子供のころに長良川が決壊して、親とともに避難を経験しました。2000年の東海豪雨は愛知県での水害で、今住んでいる名古屋の家の近くで被害があり、このときわたし自身は何もできず、今も後悔があります。

実家の近くに橋があるのですが、橋を越えると別世界でした。そのときの状況は本当に悲惨で、現在でも浸水深標識として残されています。

――2015年9月に発生した関東・東北豪雨では幡ヶ谷再生大学の活動現場にも参加していましたね（Hatasai Magazine Vol.6 P.19）。今回の災害は、あのころの経験は生かされたのでしょうか。

それまでボランティアをする方々って、どこかで"別の世界の人"という認識でいたん

ですよね。

それが2015年に開催された『東北ジャム2015 in 女川』(宮城県女川町にて開催)で幡ヶ谷再生大学のブースで「ボランティア」の概念についていろいろと教えてもらえました。そのときに、だんだんとボランティアの固定概念がなくなっていったのを覚えています。今まで「なにもできなかった…」と、どこか後悔していましたから…。

その翌週くらいから、休みがあれば愛知県から茨城県まで通っていました。

なので、2年前に起こった（岐阜県）関市の水害では「やれることをやろう」と、すぐに社協のボランティアに行きました。

――最初から幡ヶ谷再生大学の活動に参加していたわけではなかったのですね。

最初は社協でしたが、変な言い方になるかもしれませんが、「やらないのかな？」と思っていたときにTwitterで募集がありました。あのときは「幡再があって良かった」って思いましたね。

――「良かった」という気持ちを具体的に教えてください。

幡ヶ谷再生大学の活動は、人間関係がすばらしいと思うんですよね。いろんな人が集まるのに、変な壁がないですし、大勢の人が集まるのに人間関係でおかしくならないのはいつも不思議に感じます。

――2018年当初は「岐阜自主練」として活動していましたが、現在は「東海自主練」として活動拠点となっている農家・美岳小屋さん（P.15）で農作業などを中心に活動していますね。どのような経緯から現在に至るのでしょうか。

塚本さん（Hatasai Magazine Vol.7 P.45）から、ある日「農業をやりませんか？」と電話をもらいました。「そうですね。やりましょうか」という流れになりましたね。

――「なぜ？」とはならなかったのでしょうか？（笑）

そう言われれば、そうなのかもしれませんが（笑）。でも、塚本さんのことは信頼していましたし、「彼が言うなら」という気持ちのほうが大きかったのかもしれませんね。

また、塚本さんと話していて「独立した動きをしたかった」のが互いに大きかったですね。

――具体的にどのような活動をしているのでしょうか？

美岳小屋さんでは月に数回ですが、農作業のお手伝いや、林さんによる災害・生活に役立つロープワーク講座みたいなものを中心に行っています。

――農作業の楽しさってありますか？

知らないことばかりですので、いろいろと大変ですね（笑）。「無農薬」という言葉ひとつでも、それまで簡単に言っていましたけど、こんなに大変ですごいこととは思わなかったです。

私たちは月に数回ですけど、美岳小屋オーナーの林さんは凄まじい苦労をしていると思いました。

――たとえば、どんなことでしょうか？

農作物の葉っぱを一枚ずつめくって虫をとる。これって地道な作業じゃないですか。一日中、かがんだままの姿勢でそれをやるって、とてもキツい作業なんですよね。

すごい情熱がないと無理だな、と感じました。それまで私は、落花生が土の中になっていることにびっくりしていた人間でしたので(笑)。でも、林さんはほかの団体や農家さんが諦めた畑を引き取って、畑を作っていく姿を見ていると「一緒にやろう」と思えてくるんです。それに、温かい人間性に感じるんですよね。そういう部分に共感というか、“共鳴”したのかもしれませんね。

――ロープワークはどのようなことをするのでしょうか。

最初は疑問符でした。でも、作業を進めると必要だと思うことが多々ありました。みんなでレースや団体戦をする日もあったりして、家でも練習したりして（笑）。

ロープワークを覚えることで、災害現場でも役に立つように感じますね。

――荒井さんは足掛け5年、幡ヶ谷再生大学とともに歩いてきました。ここまで続けてこれた理由はどのようなものなのでしょうか。

現在は災害ボランティアとは違って、林さんに寄り添う形で進んでいますが、やはり現場の中心になっている方の人間性の部分がすごく大きいように感じます。

林さんや東海の幡再生の個々の魅力をもっと知りたいというのも続けられる理由かな、と思います。

仮に、その人が嫌な人だったら、活動には行かないと思うんですよね。

でも、常総の水害で被災したTシャツ工場の長野さん（Hatasai Magazine Vol.6 P.13）のときは…第一印象は最悪でした（笑）。

――本当ですか（笑）。

長野さんも知っていますよ（笑）。常総へ行った初日、長野さんの第一印象が悪すぎまして（笑）。

でも、嫌な感じだったのに、なぜかまた行こうと思ったのはあの汚れたTシャツの山を見て「なんとかしなきゃ」と勝手な使命感をいだいたからかもしれません。

何度も通い、話をしたり、一緒にご飯を食べたり、飲んだりする時間って、やっぱり楽

しい、と言いますか、人間関係を築いていく面白さを味わいました。それはとてもかけがえのない時間に感じています。

――読者に一言お願いいたします。

私はもし2年前のように近場で災害が起きてしまったら、社協でもいいからボランティアに参加したいと思っています。

現在は新型コロナウイルスの影響もあり、東海自主練の活動は少し停滞していますが、落ち着いたらぜひ遊びに来てください。

幡再の活動は性別、年齢に関係なく誰もが活躍できる場だと思うんですよね。

実際社協だと、災害ボランティアの初期は特に重労働が多く、男性ボランティアのニーズが圧倒的に多くてマッチングの時間で手が挙げられないと感じます。

熊本でも、関でも感じたので、社協に参加されたことのある方は、その経験が邪魔をして躊躇してしまう方も多いのではないかと思っています。

幡再の良いところは性別年齢問わず、活躍できるという点が大きいです。

どの現場でも、どの自主練でもみんなに歓迎されると思います。

「まさか、自分たちがこうなると思っていなかったですから…」

波多野拓真
岐阜県出身
／東京都在住
会社員

幡ヶ谷再生大学の黎明期の2011年、宮城県・石巻での活動に訪れていた波多野さん。
「平成30年7月豪雨」ではご実家が被災し、そこで感じた想いを訊きました。

――2018年に起きた「平成30年7月豪雨」の災害直後の状況を教えてください。

災害が発生した日の前日から、雨がすごかったことを鮮明に覚えています。地元の同窓生のLINE（コミュニケーションアプリ）グループがあって、その会話は最初、「雨がやまないねぇ」だったんですけど、次第に「大丈夫？」になっていきました。

翌日に誰かが、地元のその状況を写真に撮ってLINEへ送ってくれたんです。そしたら、僕の学生時代の通学路やよく集まっていたたまり場、近くの喫茶店などが今にも浸水しそうな状況でした。

次第に断線などで停電になり、音信不通になっている家があるとか、時間が経つにつれて連絡が取れない友人も出てきて、「やばくないか？」とLINEでそんな会話になり始めました。

幸いなことに親とは連絡が取れ、「大丈夫？帰ろうか？」と声をかけたんですが、「大丈夫！無理するな」と返事が返ってきました。

弟も東京にいるので、「今夜から行こうか」と職場に休みをもらい、品川駅から最終の名古屋行きの新幹線で一緒に実家へ向かうことにしました。

――やはり、不安でいっぱいだったのでしょうか。

いえ（笑）。最初は呑気（のんき）なものでした。道も復旧していると聞いていましたし、ゆるい“ノリ”でしたね。名古屋駅に到着して、日持ちする食料品や飲料水を多めに買って、実家に向かいました。

弟と「こんなときに俺たちが突然来たら、おじいちゃんとおばあちゃん喜んでくれるだろうなぁ」とか、どこか“ヒーロー気取り”でいましたね。

でも、実家に近づくにつれて、子どものころからよく知っている河川の水かさが見たことのないくらいの位置にまで上がっていました。ガードレールに草や枝などが引っかかっていて、流された車が横転していたりで恐怖を覚えました。

自分が生まれ育ち、帰郷すれば懐かしい風景が、「大丈夫か？」ではなく「なにこれ…」と思うほど一変していました。

――想像以上でしたか。

想像をはるかに超えていました…。

実家の隣に喫茶店があるのですが、そこも水没してしまい、ショックでした。駐車場に車を停め、深夜なのに車を出た瞬間に空気が埃っぽかったのを覚えています。

家に入ったら、玄関はまだビチャビチャで、家全体が水浸しになっていました。我が家では昔からインコを飼っていたのですが、インコはいなくて…鳥かごにはゴミが引っかかっていて…。

おじいちゃんとおばあちゃんの部屋に行くと、畳も、仏壇もなくなっていて、これまでの人生で経験したことのないほどのショックを受けました。

東京から“ある種のノリ”で来ていた自分が恥ずかしくなりましたし、「もっと早く来れば良かった」とも思いました。

僕たちが来たことで２階に避難していたおばあちゃんが１階に降りてきて、僕らを優しく迎えてくれました。

気がついたら、僕は泣いていました。

――おばあちゃんにはなにか声は掛けたんですか？

ただただ笑顔で迎えてくれました。そのときになにか声をかけてくれたのかもしれませんが、ショックでなにも覚えていないです。おばあちゃんは伊勢湾台風（1959年に発生した大型災害）を経験していたこともあってか、ただ、笑顔だったことは覚えています。

実家に戻ってきたことも誇れなかったですし、家の惨状を前になにも言えなくなっていました。ただ、「こんなときにいてあげられなくてごめんね」と思うばかりでした。

その日は弟と車で１泊し、翌日には親戚一同で泥かきをしました。まったく進まなくて、みんなで「どうしようか…」と途方に暮れていましたね。

――幡ヶ谷再生大学としての活動はいつから開始したのでしょうか。

ちょうど１週間後でしたね。地元へ帰った翌日に被災した実家と近隣の惨状を、写真や動画で撮ったりしてSNSに投稿したんです。

そうしたらYUさん（アパレルブランド『VIRGO wear worksデザイナー兼代表』：幡ヶ谷再生大学 復興再生部副部長）が「大丈夫か？」と連絡をくれたんです。

――そうだったんですね。

僕は2012年から4年間、YUさんの会社でお世話になりました。とても良くしてくれましたし、仕事だけじゃなくさまざまなことを教えてもらいましたが、失礼な辞め方をしてしまったこともあり、少し疎遠になっていました。

展示会やLIVEなどには誘ってもらっていましたが、自分としてはやはり距離をとっていたのかもしれません。

ちょうどそのころにVIRGOの受注会が岐阜であったようで、YUさんから「来週末にそっち行くから活動やろうよ」と声をかけてもらいました。本当にうれしかったです。

――何人くらい集まったのでしょうか。

そのときは4～5人くらいだったと思います。でも、人数じゃなくて、来てくれることだけで本当にありがたかったです。

自分も大なり小なり幡ヶ谷再生大学の初期の石巻（Hatasai Magazine Special Issue）での活動に参加させてもらいましたが、「見え方」がまったく違いました。

小渕浜での活動と、自分が被災者として経験するのは、180度異なりましたね。まさか、自分たちがこうなると思ってなかったですから…。

――活動初日はどのような活動をしていましたか。

YUさんは受注会の準備や移動で疲れていたはずなのに、それをおくびにも出さず、陣頭指揮を取ってくれました。

家の泥出しや廃棄する家財の搬出などをやってもらいました。幡ヶ谷再生大学の活動に慣れていた方が多くいて、YUさんとも顔見知りの方がいらっしゃって、作業は順調に進んで家族も驚いていました（笑）。

家の近くにおじいちゃんが作った水車があって、それが観光資源にもなっていたんです。その水車の掃除から始まり、修理も一緒にやってくださいました。

――私もその光景を岐阜自主練（現東海自主練）のTwitterで見ていました。波多野さんも何度か活動されたのでしょうか。

僕は最初の活動以来、東京での仕事もあって、なかなか参加できなくて…。Twitterの写真は楽しみに見ていました。ありがたさと申し訳ない気持ちで…。

ある日、被災してからこれまで見たこともないくらい落ち込んでいたおじいちゃんが心配になって実家に電話したんです。そしたら母親から「幡再のみなさんが定期的に来てくれるからおじいちゃんも張り合いができて前より元気になっている」と聞いて安堵したのを覚えています。

――それはうれしいですね。

はい。その後も数カ月に１度、自宅の花壇に花を植えてくれたりして、おばあちゃんも喜んでいるようでした。

アップされる写真を見ていると、水害前よりもキレイになっていると思いましたね（笑）今ふり返ると、おじいちゃんもおばあちゃんも幡再生とのふれあいが生活の張り合いになっていた気がするんですよね。

――読者に一言お願いいたします。

僕みたいに自分の故郷を離れて仕事をしている方は多いと思うんです。僕と同じように故郷の実家が被災した方も少なくないと思います。助けに行こうにも、ほとんど戻れないのが現状で。

心のどこかで「実家を離れて仕事している人間にはボランティアは無理がある」と思ってしまった時期もありました。

でも幡再生は日本のあらゆるところで、被災地に根付いて、年間を通して活動していることは、本当にすごいことだと思います。岐阜自主練は現在、東海自主練に名前を変え、

農業を中心に活動をしています。復興支援活動だけでなく、初期メンバーとそのあとに加わった仲間たちと集まって活動していることに尊敬しています。

僕の場合はVIRGOにいただけなのに、ここまでやってもらえました。復興支援団体は、全国各地にあってどこもすばらしいとは思うんですが、横の繋がりだけでここまでやってくれる団体は、そうそうないと思います。

――一言で表すなら、どんな言葉が当てはまりますか？

感謝ですかね。

自分たちが被災して、気づかされたことがとてつもなく大きかったです。

そういえば、実家は比較的に被害が少ない地域だったのですが、それでも地元の社協の方々が何度か自宅を訪ねてこられたそうなんです。

社協の方々から「なにかお困りではないですか」と聞かれて、丁重にお断りしていたそうなんです。

その理由を聞いたら「孫がきっかけで定期的に通ってくれる幡再のみなさんの存在が、とても誇らしかったから」と笑っていましたよ（笑）。

災害に役立つ ワークショップ 東海編

HOW TO

WORK SHOP #TOKAI

もやい結び

ロープワークの先端に輪を作る結び方です。

〈特徴〉
荷重がかかっても輪の大きさが変わらず、強度もあります。
なおかつ荷重がかかっても簡単に解きやすく、万能な結び方です。

1

先端を下にして、ひらがなの「の」の字のようにします。

2

「の」の字の輪の部分に下から先端を通します。

3

くぐらせた後は先端じゃない方のロープをくぐり、また先端を輪に戻します。

4

写真のようにロープを持ち、引っ張って締め込みます。

5

これで『もやい結び』は完成ですが、先端が抜けないように写真のように結ぶと解けにくくなります。

6

解くときは下部写真の部分を引っ張って緩めると簡単に解けます。
※下部の写真はもやい結びを裏に向けた状態

HOW TO

WORK SHOP #TOKAI

まき結び

なにかにロープを結びつけたいときや、束ねたいときに使う結び方です。

〈特徴〉
これも緩みにくく、かつ、解きやすい結び方です。

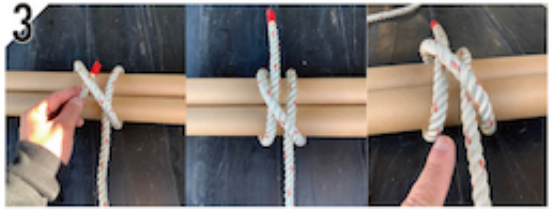
1

まずロープを上からくぐらせて、右側に抜きます。

2

ロープをクロスするように左側から潜らせます。

3



写真のように先端を通します。

4

ロープの両側を持って締め込みます。このとき角で締めるとより締まります。

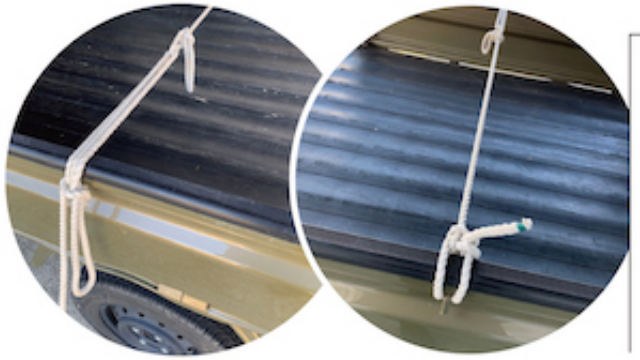
5

これで完成ですが、このままでは解けやすいので写真のように結ぶと解けにくくなります。

6

2カ所縛ると束ねやすくなります。

WORK SHOP #TOKAI



トラック結び 南京結び

トラックに荷物を載せたりして荷を締めて落ちないようにする結び方です。

こちらはいろいろな結び方や人によってやり方がありますが、東海自主練で行っているやり方をお伝えます。

1

まず先端にもやい結びを作り、フックにかけます。

2

次にロープの途中で写真のようにします。

3

写真のように上から重ねて手首を回すようにロープを引っ掛けます。

4

もやい結びの途中のように輪にUの字が入ったような状態にします。

5

この状態でもトラック結びはできますが、より解けにくくするためにUの字を『もやい結び』のようにします。こうすることで解けにくくなり、もやい結びのように解くことも容易です。

6

そして、ロープの途中を指差している輪に通します。

7

通した輪の部分を引っ張って、反対側のフックにかけます。そして先端を引っ張ると抵抗はありますが3倍ぐらいの力で引けます。

8

このままでは手を離すと緩んでしまうので、写真のように「の」の字の反対のように作り、フックにかけて締めます。

9

もう一度同じように作ります。

10

くぐらせた後は先端じゃない方のロープをくぐり、また先端を輪に戻します。

11

この右側の輪にロープを通します。

12

そして引っ張ります。

13

長すぎると危ないので短く調整します。最後に余ったロープをまとめてトラックに載せたら完成です。

14

緩めるときはここを引けば解けます。

今回紹介した結び方は、ほかにもたくさんやり方がありますが、気になる方は東海自主練で防災ワークショップとして行っていますので、ぜひご参加ください。
また、東海自主練 Twitter の方へご連絡いただければ質問にもお応えしますので、お気軽にお声掛けください。

東海自主練 Twitter：@Jishuren_Tokai

「大阪府北部地震」支援活動
大阪編

02 大阪

大阪府北部地震 2019.06.18

直近の人口：8,815,191 名
死者・行方不明・負傷者：364 名
避難者数：2,397 名
ボランティア：約 5,670 名

（参考資料）
大阪府北部を震源とする地震に係る被害状況等について（内閣府）：
http://www.bousai.go.jp/updates/h30jishin_osaka/index.html
平成30年台風第21号に係る被害状況等について（内閣府）：
http://www.bousai.go.jp/updates/h30typhoon21/index.html

平成30年台風21号（大阪）

発生日：2018 年 6 月 18 日
死者・行方不明・負傷者：501 名
避難者数：509 名
ボランティア：約 1,800 名

（参考資料）
大阪社会福祉協議会：
https://www.osakafusyakyo.or.jp/disastersupport/index.html
台風21号にかかる被害状況等について（大阪府）：
http://www.pref.osaka.lg.jp/attach/34503/00302243/30.pdf

2018年6月18日、最大震度6弱の地震が大阪府北部を襲いました。
幡ヶ谷再生大学は発生直後から現地入りし、被害に遭われた方とともに復興活動を行いました。
災害当時の様子、「大阪自主練」発足後の試行錯誤の日々、現在でもつづく絆について話していただきました。

「荷物を見るたびに、あの賑やかだった日々を思い出しています」

大西喜久恵
大阪府出身
大阪府在住

大阪自主練の拠点だった大西さん宅。奥様の喜久恵さんに幡再生との出会いから活動の日々、そして休止までを訊きました。

――2018年に発生した「大阪府北部地震」直後の状況を教えてください。

ちょうどパートに行く道中で、地震が発生したときは立っていられなくなるほどの揺れを感じました。

自宅が心配になってすぐに戻りました。戻ると食器棚に入っていた食器が全部出ておりましたし、神棚の飾りが落ちていて、主人に「直撃しなくて良かったね」と話していました。

地震も大変でしたが、そのあとの台風（平成30年台風21号）のほうが恐怖を感じました。台風が直撃したときは瓦の落ちる音が怖かったです。

張ったばかりのブルーシートも風であおられ、「バサバサ」と音を立てていて、本当に怖かったです。

阪神淡路大震災（平成7年に発生）のときと同じくらい家が揺れたのを覚えています。個人的には、あの台風で被害が拡がった印象を受けました。

――幡ヶ谷再生大学との接点はどこから生まれたのでしょうか？？

たしか、ボランティアセンターだったと思います。そのころ、役所に家の修繕のことなどを聞きに行き「住居は修繕できるが、居住していない納屋での作業はできません」と言われたときでした。私みたいな人たちばかりが集まった場所で「なにかお手伝いできることはありませんか？」と話かけられたのが最初だったと思います。

――最初は「怪しんでいた」と聞きました（笑）

最初は、ですよ（笑）。だって、そんな"うまい話"あるわけない、と思うじゃないですか。でも、名前に「大学」って入っているし…「大丈夫だろうか」と思ったのが第一印象でしたかね。

作業に来てほしい反面、災害があるとどこでも人を騙すような怪しいおかしな団体の話も出回るじゃないですか…。

そのときは勢いもあって「じゃあ、よろしくお願いします」とは言いましたけど…。

――どのあたりから怪しい気持ちが信用に繋がっていったのでしょうか？

パートの友人に相談したら、その人が音楽とかバンドが好きで幡ヶ谷再生大学を知っていたんですよね。「この団体なら大丈夫だよ。おかしなことする団体じゃない」と教えてくれました。

Twitter も見せてくれ、「全国各地で復興支援活動をやっているから」と説明してくれました。

――活動初日のことを教えてください。

たくさんの方が来てくれはって、男の人に混じって女の人もテキパキ動いていて驚いたのを覚えています。

最初はお弁当を各自で持参してくれていたのかな？ 2回か3回目の活動のときに「台所を貸してもらえませんか？」と言うので「何

するんだろう」と思いながら、承諾しました。

男の人は屋根のブルーシート張りをして、女の人たちが台所でお昼ごはんを作りはじめ、私たち家族と一緒に活動に来たみんなで食べました。毎回、賑やかで楽しかったですよ。

――幡ヶ谷再生大学が大西さんのお宅へお邪魔する中で、嫌な気持ちにはならなかったですか。

それはないですよ。みんな「お母さん、お母さん」と呼んでくれて、親近感を覚えていました。主人は脳梗塞を患い、不自由になってしまったのですが、来てくれた子たちはみんなが垣根なく話しかけてくれ、毎回喜んでいましたよ。

それに「いつか片付けよう」と思っていた納屋の片付けも隅々までやってくださって、感謝しています。

――大阪自主練は一旦、休止になりました。寂しさはありますか？

そうですね…。活動のある前日は、台所の掃除などをやっていたのですが、それがなくなると思うと寂しさみたいなものはありますね。

あの子たちが片付けてくれた納屋は現在も使っているのですが、あの子たちが置いていった旗とか、使っていた荷物を見ると懐かしくなりますね。

――荷物はまだ置かせていただいているんですね。すみません…。不要でしたら引き取りに行きますが。

いえ、納屋はあの子たちが片付けてくれた

おかげで広々と使えるようになりましたし、いつかあの荷物たちが活躍する日が来ると思っています。天災がないに越したことはないですけどね…。

その荷物を見るたびに、あの賑やかだった日々を思い出しています。

「いろいろありましたが、すべて良い思い出です。『ありがとう』しかありません」

野田啓一
大阪府出身／大阪府在住　会社員
清家哲生
大阪府出身／大阪府在住　自営業
りょうこ
兵庫県出身／大阪府在住　会社員

「大阪府北部地震」が発生すると、大阪自主練を立ち上げ、2年間活動。その中心人物となった野田さん、清家さん、りょうこさんに立ち上げから一旦の活動休止までを訊きました。

――2018年に発生した「大阪府北部地震」直後の状況を教えてください。

りょうこ（以下：R）　私はそのころ、寝屋川市付近に住んでいたのですが、朝8時前に大きな揺れがありました。家のなかはなにか落ちたりとかなかったですね。停電もしていなくて、ガスも復旧ボタンを押して、すぐに使えました。

そのまま会社に出勤しましたが、その後、テレビなどで交通機関やいろいろなところに影響が出ているのを知りました。

会社のパートさんの家では食器が割れ、足に怪我を負った話を耳にしました。我が家ではもともと割れるものを頭より上に置いていなかったり、突っ張り棒を充てていたのでなにもなかったのかな、と。

日ごろの備えは大事だなと感じました。

清家哲生（以下：S）　経験したことがないほどの長い時間、揺れていましたね。住んでいるマンションのエレベーターが止まってしまったのを覚えています。

それから電車も止まって…歩いて出勤している人の長い列ができていましたね。

野田啓一（以下：N）　うちのマンションは免震構造なので変な揺れ方をしていました。揺れは経験したことのない大きさでしたが、被害がそんなに出るとは思いませんでした。電車が止まっていたので、車で行こうと思ったら立体駐車場が動かず自転車で会社に行きました。タクシーも来ないので、歩道は人で溢れていました。

R：　その後、一部地域ではガスが止まってしまい、夕方になると会社近くのスーパー銭湯に車列ができていました。

――そのときの心境を思い出せる範囲で聞かせてもらえたら、と思います。

R：　テレビなどメディアの報道は「当日の電車の運休」と「被害の大きな地域」を繰り返し報道するばかりで、実際の影響と「温度差があるなぁ」と思っていました。

被害地域は震源地に近い狭いエリアに集中していましたので、それ以外の地域は電車以

外それほど影響がなかった記憶があります。
S：　たしかに。そんな感じでしたね。
N：「大阪府北部地震」という名前だけあって茨木市、高槻市に被害が集中していましたね。

――幡ヶ谷再生大学との接点はどこから生まれたのでしょうか？？

R：　私は以前、幡ヶ谷再生大学の出展や復興再生部の活動に参加させてもらった経験があり、ユカリさんからメールをもらいました。
N：　自分はXmas EileenのDJ（Hatasai Magazine Vol.7 P.114）さんから声がかかりました。

以前熊本にボランティアに行った際に、『えれふぁんと（飲食店：大阪府大阪市中央区）』に集まった支援物資を運んだことがあり、BRAHMANのファンというのを知っていたから声がかかったんだと思います。
R：　集まった日は土砂降りで、アメリカ村のお店に呼び出され、石巻の穴子をいただいたのを覚えています（笑）。その日に初めて野田さんに会いました。
N：　そうだった(笑)。ユカリさんともその日、初めて会いました。

――最初はどんなことを話したのでしょうか？

N：　当時、日本のあちらこちらで災害が発生していたこともあり、ユカリさんから「大阪は大阪で頑張ってほしい」と言われました。

――「大阪自主練」として最初に行動したことを教えてください。

R：Twitterのアカウントを作成しました。

――まず募集を！という流れだったのですか？

R：　いえ、募集はせずに「始動しますよ」という形を作っただけでした。
N：　その当時、復興再生部で活動したことがなかったので、えれふぁんとさんの活動に参加していました。
R：　募集はもっとあとでしたね。「まず現場を見よう」と茨木市へ行きました。自主練として初めて動いたのはその日で、その年に近隣で中止になった音楽フェスティバルの開催日でしたのでよく覚えています。

――ひとりで現場に向かったのでしょうか。

R：　いえ、幡ヶ谷再生大学陸上部の方々と私だったと思います。
N：　行きましたね。大阪のライブハウス『Fandango（ファンダンゴ）』の村上さん（Hatasai Magazine Vol.7 P.78）と複数のグループも一緒でしたね。

現場視察へ行った翌日に、とりあえず現場へ入ってみようとボランティアセンターの活動に参加したんです。

――どんなことから始めたのでしょうか？

R：　屋根の上での作業は危険、と全面的に禁止されていました。瓦の作業が一番多いのに、「危険だからやってはダメだ」と言われたことに違和感を覚えました。

なので、脚立などに登って割れた瓦を落としたり、制限が多いなかでできる範囲の作業をしていました。

災害ゴミか区別のつかないものの廃棄の手伝いや、廃材運びが主な作業内容でした。

作業後、「なにか違うよね？」とみんなで話し合いました。
N：　その日は、音楽フェスティバルに行けなくなった一部のファンが大型アミューズメントパークで“大暴れ”して問題になっていた日でした。

僕はその日、BRAHMANのTシャツを着て活動していたのですが、それを見てくれていた方が、「バンドTを背負うってこういうことだよな」とツイートしてくれたのを発見して感激したのを覚えています。

――幡ヶ谷再生大学として活動を始めようと思ったのはいつからだったのでしょうか？？

R：　ボランティアセンターの作業で一緒になった方に東福井地区の被害を聞いていたので、見に行ったんです。そこで大西さん(P.31)に出会いました。
N：　あの地域は被害が大きかったこともあり、被災されていた大西さんにお声がけし、幡ヶ谷再生大学の活動を説明しました。

大西さんも、偶然自分たちが話しかけた直前に行政の方が来て、「被害が大きい箇所は倉庫なので、この地震では居住区以外は支援できない」と言われたらしく、途方にくれていたと言っていました。

そこで「よろしければ、お手伝いします」ということで始まりました。

最初は警戒されていましたが、大西さんの会社の方が幡ヶ谷再生大学のことを知ってはって、「安心した」と言ってもらえました。

――そこからTwitterで募集をかけ、活動の日々が始まるわけですか？

N：　幡ヶ谷再生大学陸上部の仲間で、熊本や朝倉で幡再の活動経験もある福岡の浅井さん（Hatasai Magazine Vol.7 P.42）がちょ

くちょく仕事の関係で大阪に来ていたこともあって、いろいろと相談に乗ってもらいました。

R：「大阪が不安定だから」って言われたんですよね（笑）

――なぜ不安定だったのか、今振り返るとその原因はどこにあると思いますか？

N：　僕らは復興再生部への参加経験がなく、その方針を知らなかったのが一番大きかったのかな、と思います。Xmas Eileen DJさんや村上さんにもLINEなどでサポートしてもらいました。

R：　屋根の上の作業なんて誰もやったことないし、野田さんたちが幡ヶ谷再生大学陸上部に入部していたこともあり、募集かけずとも人数揃っちゃうし…。どうしていいかも分からないから、意見はぶつかりましたね。

N：　そこからが僕らのバトルの始まりでした。

R：　もうバチバチでしたね（笑）。

――バチバチになった根本的な理由を振り返るとどのようなものだったのでしょうか。

N：　もともと陸上部は「有事のために身体を鍛えている」という主旨で活動をしているので、今回のような場面でその陸上部員たちが手を貸してくれて活動しているのに「陸上部を出すな」と言われてカチンときました。

R：「出すな」じゃなくて、「募集をかけるから陸上部のメンバーもそこに応募してほしい」ということだったんです（笑）。「幡ヶ谷再生大学の自主練というのは、募集をかけて集まった人たちと活動しないと自主練じゃない」と思っていましたから、当時は時間もないし早く被災した方を手助けしたいと焦っていましたね…。

――「右も左も分からず立ち上げた」という感じだったのでしょうか。

R：　まさにそれです。

N：　復興再生部のイメージは、被災地へ向かい、手が足りない現場を見つけては、募集をかけて集まった人たちで、片っ端から作業していくのだと思っていました。なので、幡ヶ谷再生大学復興再生部の活動は、「人との繋がりによって被災現場に入り、一カ所に根をおろして活動する」と言われて意味がわからなかったです。

あちこちで被害が生じているのになぜ一カ所にとどまるのか、意味がわかりませんでした。

――では、転機になったのはいつごろだったのでしょうか？

R：　私的な転機は山口さん（P.94,95）と金川さん（Hatasai Magazine Special Issue P.31）を含めて、みんなで話し合いしたころかなと思います。

S：　そのころからLINEなどの連絡系統も交通整理され、楽になりました。

N：　あのころ、一番モメた原因は、高所作業という危険を伴う作業がほとんどだったので安全面をどう確保するかは譲れませんでした。

作業者の安全面を軽視するような雰囲気があったので、それならば「何かあったときの責任は取れないので自分はやめる」と言いました。そこで山口さんが大阪に来てくれて、思いとどまりました。それまでは、ユカリさんや大阪の自主練のみんなとは意見が合わず、モヤモヤしながらやっていましたから。

浅井さんや、熊本や東海でも幡再の活動経験がある塚本さん（Hatasai Magazine Vol.7 P.45）も来てくれ、「大阪のやり方でいい」と言ってくれたので、「せやろー」と思いながらやっていましたね（笑）。

ユカリさんが来て作業してくれたときは、仕事で欠席していたので、結局「幡再のやり方」が分からずじまいでしたが、鎌倉さん（tactics records /BRAHMANマネジャー）が活動に参加されたとき、「幡ヶ谷再生大学」とはなにかを懇切丁寧に教えていただきました。

「自己主張ばかりでなく、幡再のやり方でいってみよう」と考えを正されました。

そのころには、えれふぁんとチームやサポウィズ（バンド『MAN WITH A MISSION』の支援プロジェクト）チーム、NPO法人『茨木ベース』の活躍もあり、大体の支援活動も落ち着いてきたのもありましたので。

――まわりの仲間たちが、活動を収束していく中で寂しさみたいなものはありましたか？

N：　それはまったくなかったですね。高槻はまだまだでしたし、相次ぐ台風の襲来で泉南地方も被災していましたし、活動はずっと続くと思っていました。

えれふぁんとチーム、ファンダンゴチーム、サポウィズとよく行動を共にしていましたし、できないところをフォローしてもらいながら、活動していました。資材の提供も受けていましたので、もはや"同志"という感覚でしたね。

S：　地震よりそのあとの台風（平成30年台

風第21号）のほうが大変でした。きれいに張れたブルーシートが剥がれているのを見るとショックでした。

R：　地震よりこの台風のほうが怖かったです…。

N：　ブルーシートも台風ごとに修復が必要なので、会社を休んで作業したこともありました。

――しかし、その後も大阪自主練として、大西さん宅やお寺の修繕などをしましたね。

N：　あらゆる技術が向上したこともあったのかと思います。作業自体も楽しかったですし、参加される方々も、気持ちの良い方ばっかりで。出会いも含め本当に楽しかったですし、勉強にもなりました。

自分がどういう人間になりたいのか、人が困っているときにどういう動きができるのか、と常々考えていたことではありましたから。活動を通して生まれた大西さんのご家族とのふれあいも良い思い出です。お父さんとは行

くたびに打ち解けてくれて、たくさん話をしてくれるようになりました。

S：　暑くても、高所が怖くても"なんとかしなきゃいけない"。その気持ちは全員同じだったのだと思います。

R：　それはありましたね。

――清家さんは自主練ではなく、幡ヶ谷再生大学"本隊"での活動に参加して「感銘を受けた」と聞きました。その辺りをお聞かせください。

S：　ユカリさんと話して幡ヶ谷再生大学のやり方を理解したのですが、基本的に大阪自主練がやってきたことと同じだと感じたんです。野田さんが言ったように、「活動に来てくれる人の安全をどう確保するか」だけ意見が違うな、と感じました。

これまでの幡ヶ谷再生大学の現場で、高所作業に慣れた方が活動に参加してくださっていたのですが、高所作業に自信を持って作業に慣れている方が一緒に居てくださったら安心感が違うんですよね。そういう自信を持って屋根に上がって、手伝ってくださる人に接しなきゃ、と気持ちが変わりました。

自分が登るのと、登ってもらうことの両方の危険を受け入れてしまったことへの後悔は残っていますね。全然うまくできなかったけど、そのバランスを取る役になろうとしてはいたんですが…

N：　取れていましたよ（笑）

R：　私もそう思います（笑）

S：　本当ですか？（笑）でも、屋根に登っているときは、めっちゃ怖かったんですよね。実際（笑）

――その後、大阪自主練は2020年に一旦活動休止を迎えました。

N：　大西さん宅のブルーシートの張替えは何度もしていたんですが、落ち着いてきたので、屋根の被害が大きい倉庫の復旧作業をしようと思っていました。ちょうどそのころ、大阪府の屋根修復業者さんも落ち着いてきて、母屋と倉庫の屋根の修復作業を業者に依頼すると聞き、大西さん宅の作業は終わりにしようと思いました。

R：　私は幡ヶ谷再生大学が活動に入った石巻、常総、いわき、熊本にお邪魔しました。地域性もあると思うんですが、大阪自主練はほかの自主練と違って、家が直ってしまったら次の活動することがなかったのも、活動を休止するきっかけなのかなと思います。

それに活動を停滞させた状態でも、TwitterのDMに「参加したい」と書き込んでくださる方々に申し訳なかったので、一旦活動休止の宣言がいるなと思いました。

――毎年のように全国のどこかで天災が頻発しています。また大阪が天災に見舞われたとき、ふたたび大阪自主練は立ち上がりますか？

R：　その規模にもよりますが、経験値はできたのかなと思っています。「何かしたい」と思ったときにあるのが幡ヶ谷再生大学なので、その気持ちの受け皿になってくれるのが、ありがたかったですからね。

S：　天災に見舞われないことを願いますが、また天災があったときには同じメンバーで募集して、みんなで活動という状況でしたら大丈夫だと思います（笑）。いろいろありましたが、すべて良い思い出です。「ありがとう」しかありません。

N：　幡再らしくまとめられたらいいのですが、自分は正直幡再にはこだわってないんですよね。これまでもそうでしたが、どのような形であれ、できる範囲でボランティア活動は続けていきます。

今でも心にずっと残っているのは、学長（TOSHI-LOW）の「助けられるときに助けないで、自分が被災したときにだけ助けを求めるなよ」という言葉なんですよね。

災害は他人事ではありませんし、被災したときに大切なのは"助け合い"だと考えています。熊本へボランティアに行ったとき、「助けてもらったから」と全国から多くの方が集まっていました。そのときに人間って本当に素晴らしいなと思いました。自分に恥じることがないように行動したいと思っています。

幡再には本当に感謝しています。幡再という旗のもとで、人が集まり、活動ができました。幡再の理念があったから、参加してくれる方々と想いを共有できました。

そしてその理念の大きさ、行動することの大切さを感じた日々でした。

何よりも仲間と過ごした時間はかけがえのないものになっています。

それはこれからの人生の糧になると思います。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

当時のバトルも今となっては良い思い出になっています（笑）。

R：　ほんとに（笑）。あのときはいっぱいいっぱいでした。いろいろとごめんなさい…。

S：「ごめんなさい」とか、もうええよ（笑）。

R：　でも、大阪自主練の活動は、野田さんや清家さんがいなかったら続かなかったと思います。めちゃくちゃ頼もしかったです。

S：　りょうこさんや金川さんがいてくれたから、Twitterでの大阪自主練の発信や活動報告が更新されていたので、苦手なところをカバーしてくれて、俺らも助かりました。

N：　オールオッケーでしょ（笑）。

一同：　（笑）。

災害に役立つ
ワークショップ
大　阪　編

WORK SHOP #OSAKA

瓦の対応

2018年に発生した「大阪北部地震」では多くの家屋の瓦が落下しました。
大阪自主練では雨漏れを防ぐため、ブルーシートで応急処置を行いました。
屋根のブルーシート掛けは日進月歩、進化しており、2019年当時までの
技術を紹介します。

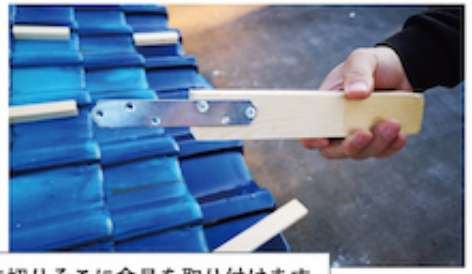
発生当初

ブルーシートを瓦が崩れた箇所に掛け、
土のう袋に砂利を入れて重りにしていました。

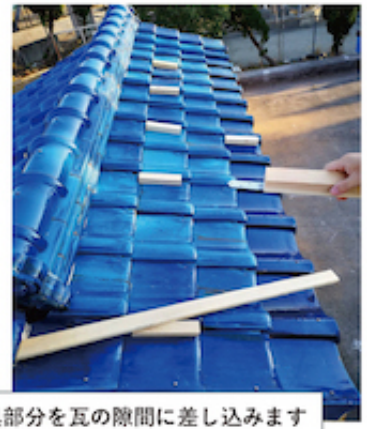
これだと土のう袋の劣化やそれが原因で落下する恐れがあります。
コストも労力もかかります。

発生当初

最終段階

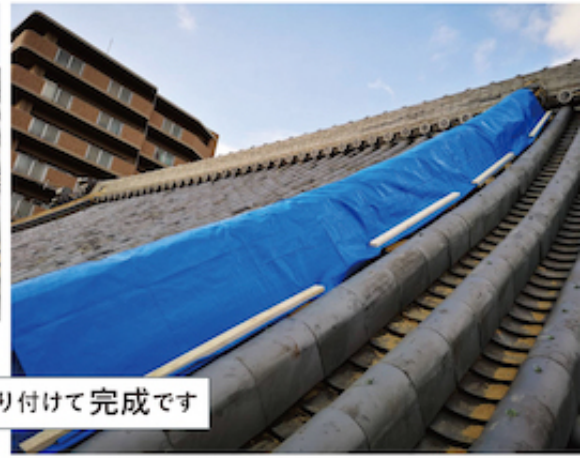


1 角材を短めに切りそこに金具を取り付けます



2 金具部分を瓦の隙間に差し込みます

3 そこに長めの角材を取り付けます



4 ブルーシートを板材で挟んで取り付けて完成です

「平成30年7月豪雨」支援活動
愛媛編

03 愛媛

吉田（宇和島）

直近の人口：12,292名
死者・行方不明・負傷者：42名
避難者数：1,149名
ボランティア：約26,000名

〈参考資料〉
平成30年7月豪雨の被害状況（宇和島市）：
https://www.city.uwajima.ehime.jp/uploaded/attachment/19537.pdf

2018年6月28日から7月8日にかけて、台風7号および梅雨前線等の影響により西日本を中心に全国的に広い範囲で集中豪雨が襲い、甚大な爪痕を残しました。
幡ヶ谷再生大学は発生直後から現地入りし、被害に遭われた方たちとともに活動を行いました。
災害直後の様子、仲間との絆。活動を通じて感じた想い。
現在でも活動をともにする「玉津柑橘倶楽部」について話していただきました。

「困っている方々にも目を向けられる人間が増えたら、もっと良い世の中になると思っています」

高田博行
愛媛県出身
／愛媛県在住
みかん農家

「平成30年7月豪雨」発生後、最初の活動の拠点となった高田宅のご主人。災害を通して感じたこと。「玉津のみかん」への誇り。感謝。今後の"在り方"を訊きました。

――2018年に起きた「平成30年7月豪雨」の災害直後の状況を教えてください。

パニック状態でしたよ。前の家の人が流されたこともあってね。もう完全にパニックです。

ライフラインは断ち切られた状況でも、携帯はバンバン鳴っていましたね。どこで聞いたのか、「動画を撮ってほしい」とテレビ局の人からも着信がありました。

すぐにレスキュー隊が来てくれて、流された人たちを一緒に探している最中でもいろいろなところから電話がかかってきていたので、携帯のバッテリーがすぐに切れて…。

充電するのに、毎日苦労したのを覚えています。

――電気はすぐに開通されたのでしょうか。

全然。何カ月かしてからでしたね。電柱も倒れて、電線も切れていましたからね。

――幡ヶ谷再生大学とはどのような接点があったのでしょうか。

それがわからないんです（笑）。気づいたときには来てくれていましたね。最初はほかのボランティア団体も来てくれていたんですけど、気づいたらいた、状態でしたね。

息子の嫁さんが音楽が好きで、いろいろな知り合いがいたから、そんな経緯で我が家の復旧活動をしてくれたんだと思う。

今、ふり返っても助かりました。自分の家だけじゃなくて、みかん畑も心配でそこにも行かなきゃならなかったから。

――最初はどのような作業を行ったのでしょうか。

災害が発生して1カ月くらいはみんな、みかん畑のほうの仕事ができなかったんですよね。自宅のほうの復旧作業をまずやらなければいけなかったので。

8月のお盆前くらいから幡再以外のボランティアのみなさんには自宅のほうをやってもらって、幡再にはみかん畑を中心に作業をしてもらいましたね。

1日通して幡再は作業をしてくれていたので、その年の年末まで幡再に助けてもらいました。

――思い出に色濃く残っていることなどはありますか？

なんでしょうね。北海道や沖縄からも来てくれたのは印象に残っています。

災害に遭って、全国から集まる支援物資もうれしかったけど、みんなが仕事に手が回らない状況で、手伝ってくれる時点でかなり助けられましたよ。

――とくに思い出に残る1日があれば、教えてください。

この土地に1日に何十人とボランティアに来て作業をしてもらったことは今までなかった。あれは楽しかったですし、被災して落ち込んでいるときにあれだけやってもらえたら、励まされるというか、誰だって勇気をもらう気分になりますよ。

もう3年も経ちますが、とても前向きになれたのは思い出に残っています。

――現在、日本では災害が頻発していますね。被災を経験した当事者の視点でアドバイスがあれば、お願いしたいです。

住民の連携だと思います。地域の助け合いとか。もう全国のどこで災害が起こってもおかしくないと、あのときに痛感しました。

この地で生まれ育った身として、あんな経験は初めてでしたから。

土砂崩れなんかなかったですし、土砂崩れでトンネルが埋まってしまった経験なんてなかったですから。

日本で「ここは大丈夫」という場所はもうないんじゃないかなと思います。

――そうした事態を踏まえて、用意しておいたほうが良いものとかはありますか？

あの災害を体験して思ったことなんですが、どれだけ備えていても、逃げるときにそんなこと考えられないですね。

そんなこと考えていたら逃げられないですし。近所の家は土砂崩れで家が“千切れた”状態になっているし、家の外へ出ようにも、たった3メートルも動けなかったので。

――命あっての、ということになりますよね…。

そうは言っても大変だから。千葉（2019年に発生した台風15号）に知り合いがいるんですが、大変。本当に…。

――でも、生きていて良かったな、と思うときはありますか…？

うーん（笑）。お金がたくさんあれば、別なんでしょうけど。

でも、我々みたいな農家はやっぱり幸せだと思うんです。市場の方にたくさん助けてもらえたし、全国各地から注文がたくさん入ったみたいだし。

「玉津のみかん」を応援してくれる人が全国にたくさんいるんだなぁと思いましたし、それはうれしかったです。

幡再さんもそうでしょうけど、東京の八王子からとか、全国からたくさんお見舞いに来てくれたので、本当にうれしいですよね。

だから、我々ができることは「玉津のみかん」の質を上げていくことだと思っています。

ほかのことをする必要はないと思います。

それが3年前に助けてもらった方々や、現在でも支援してくれている方々への恩返しだと思っています。

いつか、最高のみかんを作って、3年前のあのときに助けてもらった関係者に、本当の意味で恩返しできたら、と思っています。

そう思わないといけないと思うんです。人として。

俺らも大変な時期を過ごしましたし、過ごしていますけど、困っている農家さんは全国にたくさんいますから。

そういう方々にも目を向けられる人間が増えたら、もっと良い世の中になると思っています。

「幡ヶ谷と常に行動はできませんよ。あんなにも統制とれた組織に俺らみたいなのは、絶対に順応できない（笑）」

八木隆憲
愛媛県出身
／愛媛県在住
Double-u studio
Wstudio RED経営

「アニキ」の愛称で呼ばれる八木さんは、松山市で音楽スタジオを経営する傍ら、イベント制作など多岐に渡る活動で愛媛県の音楽シーンを支えています。「平成30年7月豪雨」で感じたこと、全国にいる“音楽仲間”との絆、復興について感じたことを訊きました。

――2018年に起きた「平成30年7月豪雨」の災害直後の状況を教えてください。

松山にいました。雨はすごかったんですが、洪水とかにはなってなかったです。

四星球のU太くん（Hatasai Magazine Vol.8 P.88）から「大丈夫ですか？」と電話がかかってきて、テレビをつけたら自分の地元が洪水で沈んでいることを初めて知りました。

その前から雨が続いていたので、「大洲市がヤバいんちゃう」と仲間内で話していたんですが…現実のものになるとは思いもしなかったです。

地元の友人に電話したら、「逃げようと思ったけど気づいたときには2階まで水が…」と話していて、「なんかいるものはないか？」と聞いていたときに、ほかからも連絡があっ

て、「こっちも、あっちも」となったのを覚えています。

とにかく玉津が酷いことになっているのは聞いていましたし、亮司くん（P.49）からも連絡をもらいましたね。

――亮司さんとはお知り合いだったんですね。

FM愛媛でラジオをやっていた縁や、彼の弟さんがバンドをやっていて、そのグッズを作っている関係もありました。土砂崩れで町が隔離されていることを聞いたので、支援物資を集めるだけ集めて、「とりあえず行くわ」と最初に行ったのが玉津でした。

次の日に向かったんですが、土砂崩れで通れなくて…。迂回して玉津へ入りました。

ただ、あのときの汚泥の匂いはいまだに忘れられませんね。

玉津は海も山もあるから、土砂に埋まってしまった方や、海に流されてしまった方の話も聞きました。辛かったです。

愛媛県は、夏に水不足はあっても、災害の少ない土地だったんです。20年前にあったかな？ そのくらい土地勘だったんです。

実際、玉津に到着したのは夜でした。もう真っ暗で、町の入口付近にある倉庫の前では武装したおじいちゃんが鍬（くわ）とか持って座っているんですよ。

「これはヤバイな」と見ていたら、向かいの家の人が出てきて、ずーっと僕らの方を懐中電灯で照らすんですよ。『亮司くんの友達やけん』と伝えたら通してもらったんですが、2〜3日後に話を聞くと、盗っ人やら泥棒が入ってきたらしく、「倉庫のものだけは盗られたくない」と武装していたようでした。「AKIRA（大友克洋氏の日本の漫画）か！」って（笑）。

――阪神淡路大震災のころから火事場泥棒の話は聞きますが、愛媛でも…。そのような状態から八木さんの活動は始まったのでしょうか。

ですね。最初は物資を集めることから始めました。最初は水を集め始めたんですが、直後にTOSHI-LOW（学長）から電話があって、「その集め方だと地獄見るぞ」と言われました。「本当かよ〜」と思いました。あのときは。

でも、ものの見事に水が900ケースも届いて…「これどうしよう…」と。宅配会社からバンバン電話かかってきて、「もう倉庫に置けないんですけど」と言われましたね。

――みなさんのご厚意なんですけどね…。

鹿児島のWALK INN STUDIOの太一（Hatasai Magazine Vol.7 P.87）や、大阪ファンタンゴの村上（Hatasai Magazine Vol.7 P.78）からも連絡が来て「本当に想像以上に集まるよ」とか、「ウチは10トントレーラー、10台分くらいの荷物が集まった」とかのたくさんのアドバイスをもらいましたね。

「倉庫を借りなきゃ」とか「ニーズに合わなければ廃棄処分も…」とか…それにもお金が必要だし…いろいろ考えました。

KO（北海道を拠点に活動するハード・コアバンドSLANGのヴォーカル）さんやTOSHI-LOWから「こうしたほうが良いよ」など助言をもらいました。

鎌倉（tactics records：BRAHMANマネジャー）からもメールをもらいましたね。

――どんな内容だったのでしょうか。

物資を募集する際、「その書き方だったら混乱するからやめたほうが良い」とかですね。「Idol Punch・Racco（P.78）のTwitterを参考にしたほうが良い」と教えてもらって、実際見てみると「あーなるほどなー」と。

「どういうことが必要で、曖昧なことは書いてはいけない」ということは本当に勉強になりました。誰だって最初は右も左もわからないもんですね。

2011年にtactics records（BRAHMAN/OAUが所属するレコード会社）でお菓子、米、水、餅を集めていたのを覚えているんですが、見ているのと実際やるのとでは全然違うのを改めて実感しました。

物資を集めている過程で、便乗してくる市議会議員の“先生方”もたくさんいましたね。

――便乗ですか？

そう。僕らが物資を大量に集めていることをどこかで聞きつけたんでしょうね。「その物資、僕が集めたということで写真を撮らせてもらえませんか？」とかね。

だから、無理難題を伝えてみたら即、電話を切られました（笑）。

ほかにも地域特有の“しきたり”とか、そういうのにうんざりしたこともあって、物資の募集はやめて、人を集めて現場で活動する

支援にシフトしていきました。

それからちょっとして、幡ヶ谷（再生大学）に会いましたね。

――最初からじゃなかったんですね。そもそも幡ヶ谷再生大学の存在は知っていましたか。

もちろん知っていましたよ。でも繋がりはまったくなくて、『TOSHI-LOWがやっている』くらいしか知らなかったですね。

俺らと幡ヶ谷（幡ヶ谷再生大学）は最初、まったく別の場所で活動していました。しばらくしてからですね。仲間うちの誰かが「幡ヶ谷が来ている」って教えてくれました。オレらが山側、幡ヶ谷が真ん中〜海側みたいな感じで。

人を介して俺らも玉津へ活動に行くことになったときに、幡ヶ谷に会いましたね。

――どんな印象を受けましたか？

「ちゃんとしよるなー」と思いました（笑）。ものすごく堅いイメージでした。朝礼やって、終礼もやるじゃないですか？ 俺は苦手やわーって（笑）。

俺らはチーム名もないし、飲食業界の人間も多いから朝まで飲んでいたやつが活動に来るみたいなのが普通でしたし。まず不真面目（笑）。

摘果ってみかんを摘み取る作業があるんで

すけど、捨てられるみかんを投げたりして遊んだりしますし、活動もパーっと集まって終わったら帰る、みたいな感じでしたから。

ずっとそのスタイルでやっていたら、ユカリさんや幡ヶ谷の人たちから「一緒にやりませんか？」って誘われるようになったのがキッカケでしたね。

――たとえ不真面目だとしても、活動を続けられた原動力はどのようなものだったのでしょうか。

自分たちが住む愛媛県のことだからじゃないですかね。都会の人たちがたくさん来てやっているのを指くわえて見ているよりは「やろうや」となったと思います。

あと、愛媛県民独特の変な結束力も関係している気がしますね。

それでも幡ヶ谷の活動に比べたら、俺らなんか全然ですよ。とにかく俺らは「幡ヶ谷はすごい」としか言えないですね。

――それはどのような部分でしょうか。

被災地に行ったら絶対幡ヶ谷がいて、活動していることですかね。活動のTwitter更新もハンパじゃない。「これみなさんどうやって生活しているの？」と不思議になりますよ。

それが愛媛だけじゃなく、被災された地域ごとにあるわけでしょ？ その集団が毎週末に全国で活動している。すごいことですよ。

2011年からスタートして、ずっと続いている。その気持ちに賛同したバンドマンが活動に参加して、相乗効果を生んでいる印象ですね。

――日々そのバンドマンの方々とお仕事をされている八木さんから見て、バンドマンのすごさはどのような部分がありますか。

人情みたいな部分じゃないですかね。精神的な部分なんかもしれないけど。

どのバンドも「大丈夫？」と気にかけてくれましたし、TOSHI-LOWやKOさん、細美(Hatasai Magazine Vol.7 P.117)くんに「来てくれ！」とお願いしたら、彼らはどんな形でも来てくれる。

10-FEET（京都出身のスリーピースバンド）のTAKUMAもORANGE RANGE（沖縄出身の5人組ロックバンド）のYOH（Hatasai Magazine Vol.5 P.21）も来てくれました。みんなと話すと、しっかり自分の意志で愛媛に来ていることが伝わってくるんですよ。人間として尊敬できるし、偉いというか、尊いというか…。

「こんなに温かいことしてくれる人がおるんやな」って心の底から思いました。

2011年の大震災のとき、東北に水とかを持っていったんですけど、自分たちが被災して感じたのは、「こんなに効率の悪いことはないな」でした。

経験しないと「何が必要か」は分からない。地元の人って、もちろん全国から物資を送ってくれるのもうれしいんですけど、なによりも現場に来てくれるのが一番うれしいし、心が温まるんですよ。

――どこの被災地でもよく耳にしますね。

TOSHI-LOWが幡ヶ谷の活動で愛媛に来たときかな。一緒に土のうを作る仕事をしていたんですよ。デカイおっさんがふたりでせっせと仕事をするから、すぐに仕事が終わって。ふたりで小さなみかんを選定していました。

そのとき俺が「物資を集めたり、こういった活動ってさ、何が正解かも分からないし、終わりもないなー」、「実際、何でやったか分からない」と話したんですね。

そしたらTOSHI-LOWが、「バンドマンとかじゃなきゃできねーよ」って。「誰も知らねーところに物資を持っていく度胸なんて、普通の人はできねーよ」って言われて、「あぁ良かったな」って不思議と思えた。

デカイおっさんが、ふたりで肩を並べてね（笑）。完璧に戦力の無駄なんですけど、昔から知り合いで、同い年だったけど、妙に感動したのを覚えています。

――良い話ですね。

でも、幡ヶ谷と常に行動はできませんよ（笑）。

――そうなんですか？（笑）

だって無理やもん。あんなにも統制とれた組織に俺らみたいなのは、絶対に順応できない（笑）。

――でも、愛媛で開催された「ストーンハンマー（愛媛県西条市で開催された音楽フェスティバル）」にブース出展をお願いしてくれたじゃないですか！

あれは、ほかにもいろんな復興支援団体の候補があったんですけど、一番評判が良かったのが幡ヶ谷だったからですよ。僕らは地元なんで、農家の人やいろんな人の愚痴を聞けますからね…。いろいろと聞かされましたよ。その中で、幡ヶ谷はなかったら。

まぁ、俺らは「たんぽぽ倶楽部（仮）」みたいなチーム名で地道にやっていきますよ。花は勝手に咲くけど、風が吹けば飛ぶでしょ？ だけど根は強い。オレらに合っているなって思いますよ（笑）。

バンドのカップリングツアーみたいな感じで、仲の良いバンド同士がメンバー交換して機材車に乗って、ツアーの車内っぽい感じですかね。

そう考えたらおもしろいよね。復興って。

「せめて自分の家族くらいは何かあってバラバラになったときに、『集合場所』を決めたほうが絶対に良いと思います」

原田亮司
愛媛県出身
／愛媛県在住
玉津柑橘倶楽部
代表

「平成30年7月豪雨」で被災した原田さんは、直後に「玉津柑橘倶楽部」を立ち上げました。「玉津柑橘倶楽部」を立ち上げた理由、被災直後の状況、被災者だからこそ語れる「生かすべきこと」を伺いました。

――2018年に起きた「平成30年7月豪雨」の災害直後の状況を教えてください。

我が家はそこまで逼迫（ひっぱく）した状況ではなく、エアコンの室外機が水に浸からないようにブロックで上げるくらい余裕がありました。冗談も言っていた記憶がありますね。

そんなときに「ガスが漏れているから」と連絡が入り、僕は消防団に入っているので、海沿いの幹線道路まで行ったら景色が変わっていました。

何軒か土砂崩れで埋まっていて、1軒は海まで流されている状況でした。後輩がずぶ濡れのまま裸足で防波堤に立ちすくんでいた姿が強く印象に残っています。

その後輩に「家の人は？」と聞いたら、「たぶん家の中だと思います」と弱々しく返事がありました。その家は、土砂で埋まっている状況でした。

土砂の中に頭だけ見えているご遺体があって、とても聞きにくかったんですけど、その

子に「誰の頭か分かる？」と聞きました。

――壮絶ですね…。

でしたね…。家の池の鯉が騒ぐから、たまたま家を出たら土砂にさらわれた方の話も聞きました…。

それから3日くらいはレスキュー隊や、他県の機動隊とかも来ていたので、その人たちと一緒にご遺体を捜していました。土砂に流された方を探すために僕ら消防団はノコギリやチェーンソーを持って、動いていましたね。

4日目くらいまでレスキュー隊や他県の機動隊とご遺体捜しを一緒に行い、そのあと2～3週間はずっと重機に乗っていました。

この地域は農道が長く、入り組んでいるので、農道ごとに分かれて班を組んで、ほぼ突貫工事で作業をしていました。交代制でスケジュールを緻密に組んでやっていました。

――玉津全体がそのような状況だったのでしょうか。

被害が少ない人もいました。復旧作業をみんなでやっているときに、山の畑に登って作業する人もいました。井戸水は使える状態でしたし、電気はすぐに開通したので、洗車している人もいました。

トンネルも埋まって、町全体が土埃（つちぼこり）に覆われてました。主要な道路も埋まってしまったので、「まずあそこを通さないと」と、土建屋さんが尽力してくださいました。4トンのダンプカーが四六時中、ずっと往復しているような状態で、最初は生活道、そのあとは園地に行きたいので農道、そうこうしているうちに7月はほぼ終わっていました。8月に入って、町もだいぶ落ち着いたので、自分の家の作業に入れる状況でした。

最初は農作業じゃなくて、そういう復旧作業をずっとしていました。

そのころは、ちょうど「摘果」、「除草」、「消毒」という大事な作業をする時期なんですけど…。幡再が現在活動している長野（令和元年に発生した台風19号）はちょうど収穫の時期だったじゃないですか？ そう思ったら僕らはまだ収穫までに3カ月くらい猶予がありました。8月くらいから農作業を再開できたんですが、復旧作業中は「いち早く道路を復旧させる」という目標があったので。それで全員が一致団結できたんじゃないかな、と思いますね。（みかんを運ぶ）モノレールを消毒する施設とかは、ボロボロで限界だったんですけど、「何とか穫れるとこは穫らな」と、前向きな目標があって、進めたのかなと思います。

――幡ヶ谷再生大学との出会いを教えてください。

それが…まったく憶えてないんですよね（笑）。幡再が来たころは、状況も状況だったので、思い出せないんですよね。

最初、たしか高田さん（P.43）宅に作業に入っていて、「今日も来ているなぁ」と見ていた記憶があります。高田さんの若い奥さんが音楽好きで、大阪ファンダンゴの村上さん（Hatasai Magazine Vol.7 P.78）と繋がって、W studio REDのアニキ（P.45）とも繋がって、幡再も玉津に来たのかなと思うんですけど。

「気がついたらいる復興支援団体」という印象でしたね。最初は。

――玉津では最初、どのような作業から始めたのでしょうか。

まずは、土のうを大量に作ってもらいましたね。初期のころは、まだ所どころに土砂崩れがあって、小規模の「ちょっと流れた」程度の“崩れ”でしたら手で直しに行っていました。ちょっとした小道とか、土のうを使って“補修”するんですよ。とても助けられましたよ。

――作った土のうが一夜にしてなくなって、「盗まれた」と騒ぎになったこともありましたね（笑）。

そうですね（笑）。大量の土のうが一晩でなくなり、本当に盗まれたのかと思いました（笑）。農家さんが持って帰っていたんですけどね。

実際、崩れた箇所を「ちょっと直そう」と思ったら、土のう100個や200個はすぐに使い切っちゃうんですよね。

――現在はみかんの収穫作業もやらせてもらっていますね。

幡再に入ってもらっている園地は、怪我をされた方や、お年寄りの園地をメインに入ってもらっています。

――この地域はボランティアをするのに、少し特殊な“規則”があると聞きました。

そうですね。被災が落ち着いた時期に「農作業をボランティアさんにお願いするのは、やめましょう」という流れになりました。平たくいえば「タダはダメ」ということですね。アルバイトさんとボランティアさんがいて、同時に農作業をすると不公平になるんです。なので、農協とそのように取り決めました。

――その仕組みは全国的にも珍しい取り組みなのではないですか？

珍しいとは聞いていますが、調べてはいないです。我々としては、「誰であろうと働いてくれたのなら対価を支払う」という規則を作りました。

幡再にお金は払えないので、農家さんは玉津柑橘倶楽部にお金を支払って、玉津柑橘倶

楽部からは幡再へみかんやみかんジュースなど現物支給でお渡ししている仕組みですね。

今だから話せますが、この仕組みを作るの、結構大変だったんですよ（笑）。

――玉津柑橘倶楽部の存在自体が「異質」なものと聞きました。設立のキッカケはどのようなものなのだったのでしょうか。

愛媛県は、大都市圏から遠いじゃないですか？ だから個人販売でやろうと思っても、どうしても輸送コストなどがかかってしまう。なので、農協出荷が多い地域です。

また、ここ10年くらいでみかん産業自体の景気が持ち直してきました。

結果として若い子も増えてきて、市場の玉津みかんの評判も高まってきています。

また、玉津共選場は僕らみかん農家とガッチリ手を組んでやっていただいています。

その根底には、「みんながタッグを組んで頑張っていく」というのがあるからかもしれませんね。

そんな、良い流れに乗ったところで災害があったんですよね。

「良い流れを切られた」雰囲気もあったんですが、「被災して、復旧してくれるのを待とう、っていうのもどうなの？」、それなら「自分らでやろう」と復旧作業を開始しました。

僕らの親父世代や、さらに上の世代の人たちは「土建屋さんでバイトしつつ、みかんを作る」という生活を普通にしていたので、結構みんな“できる”んですよ。

なので、各地区でそういう仕切れるリーダーみたいな人がいて、男気もあって。復旧もみんなでやりましたね。

もともと「集まって何かをやる」という下地があったところに災害がおきたので、全員がそういう行動をとれたんだと思います。

でもピンチには変わりなかったので、「復旧復興＋将来の玉津のためになる会社」をやれれば良いのかなという話になりました。

僕発信ではないんですけどね。そういう趣旨で動き出したのが会社設立の経緯になると思います。

――玉津柑橘倶楽部の具体的な流通の仕組みはどのようなものなのでしょうか。

僕ら農家はみかんを作って、それを農協の共選場に出荷します。

そして僕たちが販売するみかんは、共選場から買って売ります。

みかんジュースを作るのも、共選場から加工するみかんを僕らが買って、搾汁して売っているんです。

玉津柑橘倶楽部で育てて売るんじゃなくて、一度農協を通します。

自分たちの売上にしかならない、自分たちしか儲けない、という従来の“循環”に違和感があったので。

もともと従来のままだと、自分たちにはメリットがあるけど、玉津全体にとってメリットがないですよね。

農協の共選場から買うことで、玉津全体の売り上げの底上げになる。もちろん、量がしれているので大した底上げにはならないですけどね。

全員が、地域全体が潤う“循環”を目指しています。

――このシステムも全国的に珍しいですよね？

農協に出荷もする農家さんと、個人的に売る農家さんの話しか聞いたことなかったです。

どうなんでしょうね。調べてはいませんので、「ここにしかありません」と言い切る自信はないですね（笑）。

――玉津柑橘倶楽部をおもしろく思ってない人たちもいる、という話も聞きましたが…。

僕は直接言われたことはないんですけど、

何人かは直接言われた人もいましたね。最初は、僕たちが集まって、自分らのみかんだけを持ち寄って勝手に売るんじゃないかと思っていたみたいで…。

幡再で土のうもいっぱい作ってもらいましたし、収穫時期になったらアルバイトさんが6人くらい来ていたんですけど、農協と農家さんが話してアルバイトさんを振り分けるところを丸々同じ人たちを継続的に入れる振り分けを玉津柑橘倶楽部でしたんですよ。

なので、細かくスピーディーに人材を回せたり動かしたりできましたし、玉津柑橘倶楽部が農協と農家さんのためになった側面が伝わったので、最近は聞かなくはなりましたね。

――幡ヶ谷再生大学で作業に入った園地の農家の方に聞いたんですが、「若い人が増えてきた」と仰ってました。現状を分かる範囲で教えてもらえますか。

ここはほぼ、みかん農家の地区なんで「景気が悪かったら、地元に帰ってこい」とかないんですよ。僕が12～13年前に農家を始めたときは、農業だけで生計を立てている若い人は3人くらいしかいなくて、勤めに出ている人もいました。

先ほど言った「土建屋さんでバイトして、収穫時期はみかん」という暮らしですね。

ここは農家が200何十軒あるんですけど、40歳以下は50人くらいいます。最初は少なかったんですが、徐々に増えていきました。

今までは勤めに出て、地元に戻ってくるパターンが多かったんですが、ここ何年かはそこそこ景気も良いので、高校出て農業大学へ行ってそのまま就農する人もいますね。

――就農制度みたいなものはあるのでしょうか。

補助はあります。親がやっていたので、家を継ぐっていうのがもともとのスタイルですよね。この地域もほぼみんなそうですね。移住した農家は今、3人ほどいますね。

僕らのじいさん世代は、「風呂敷1個で、宇和島でひと晩飲み明かせる」とよく言われたみたいですから、時代ですね。

僕らの親世代は、わりとそのまま農家を継ぐ時代で、人数も多いです。親世代と僕たち

若手のあいだの40代が少ない状況ですね。

地元にはいるけど公務員だったり、どこかに勤めていたり。理由として、その世代のころは景気が悪かったみたいなんですよね、僕ら親世代は。

「みかんじゃ食えない」と出て行ったみたいです。

――玉津に来て、一番驚いたのは山肌の傾斜でした。景色の中に必ずみかん畑が入ってきますね。

みかん以外、作るものがなかったんだと思いますけどね（笑）。この傾斜で、できる農作物がみかんだったのかな、と思います。僕の親世代のころは平地には田畑があったようですけど、僕が子どものころにはすでになかったですね。

全国のいろいろな農家さんを回ったことある友人が、「これほどの傾斜地でなにか作物を作っている地域は少ない」と言っていましたね。なので、もともとの土地柄なんだと思います。

作業も年間を通してあるんですよ。収穫量が多い品種を作って、合間に好みでいろいろ作って、時期になったらそれらを収穫して、それ以外は剪定したり春先に改植したり、古い木を切って、新しい苗木を植えたりしますね。

消毒もありますし、草も生えてくるし、のんびりしていたら「もう来月収穫じゃん！」ってなるんですよ（笑）。

――話を災害に戻しますが、実体験から、「被災してこういうものがあると良い」や、なにかアドバイスなどありましたらお願いします。

東京が壊滅しない限りは、たぶん2～3日したら何かしらの物資は届くんですよね。なので、2～3日、いや1週間分の防災グッズは用意しておいたほうが良いなと感じました。ウチは嫁さんが準備してくれていたので、乾パンとかビスケットをかじったりしていました。あと、水は必要ですね。2リットルのペットボトル1箱じゃ全然足りないです。

風呂は、3日くらい入れなかったですけど、さすがにそんなにストックはできないので我慢ですね。

飲み水はペットボトル2リットル2箱くらいあれば当面は凌げると思います。水道はなかなか復旧しない場合が多いですけど、物資はすぐに届きますので。

――被災された方から「家の風呂桶に水はつねに張っておけ」と言われたことがあります。

そうですね。給湯器ってどこの家にもあるじゃないですか。あれもその中のタンクから取れるようになっているんですよ。

電気が来なかったらお風呂は沸かせないですけど、ちゃんと「取り口」があって水は取れます。

飲むのは微妙ですけど。カセットコンロがあれば、沸かして飲めると思います。災害には、電気よりガスが強いと痛感しました。やはり、防災グッズがあるに越したことはないです。

また、家族とはその地域の避難所をしっかり確認しておいたほうが良いです。

地方は近所で顔も知っていますけど、都会の場合はせめて自分の家族くらいは何かあってバラバラになったときに「集合場所」を決めたほうが絶対に良いと思います。

携帯も通じない可能性もあり、安否も分からない状況になったときでも、「何かあったときはここに集合」と場所だけでも決めておくと、そこで待っていることができますからね。「来れなかったら何かあった」とハッキリ決めておくことも必要に感じますね。

意外と家族って、そういう会話をしないものですからね。

――先程、「物資は届く」とありましたが、大量に届く難題があります。こういう物資がうれしい、とかありますか？

やっぱり嗜好品（しこうひん）じゃないですかね（笑）。タバコやお酒はうれしかったです。実際。

被災すると生活のリズムが大きく狂うんです。そんなときに、ふと「日常」がほしくなるんです。

直接的な支援物資ではないですけど、実際はそういう嗜好品を渡してあげたら、ただでさえギリギリの生活をしているので、「落ち着くなぁ」と当時強く感じました。

普通、そういう発想にはならないですからね。“おくる”側からしたら。

――いわゆる「被災者の声」ってイメージできないと思うんですよね。原田さんから提案があれば、教えてください。

やはり、被災地に行くべきだと思いますね。「義援金で…」とか、どうしても被災地に行くことを遠慮したりしているんじゃないですかね。僕もそうでした。

でも、全国でこれだけ天災が起きているんで、一度被災地を訪れてほしいですね。「冷やかしみたいで…」と思うかもしれませんが、実際目で見て、肌で感じたら、心境が少し変わるかもなので。

それこそボランティアで作業員を募集していれば、一度でも体験で行ってみたら良いと思います。

被災したから理解できますけど、被災地へ行って、自販機でジュースを1本買うだけでも、その土地にお金が落ちるわけじゃないですか。それぐらいの気持ちで帰ってもらえても良いのかなって、被災してから思うようになりました。

ちょっとしたことなんです。やはり、どうしてもイメージできないですからね。

実際、自分も他人事でしたから。東北でも、関東でも、熊本でも災害はあったけど、1回も募金すらしたことなかったんで。

逆に自分たちが被災して、「こんなに人が来るのか」、「こんなにも多くの支援物資が届くのか」と驚きました。その光景を見て、今までの自分が恥ずかしくなりましたから。

「私もまだまだ経験不足ですが、一歩踏み出して、幡再に参加して良かったと思っています」

山上寿子
愛媛県出身
／愛媛県在住
会社員

これまで起こった災害では動けずにいた山上さん。愛媛県にも甚大な被害を与えた「平成30年7月豪雨」発生後、復興支援活動へ。
幡ヶ谷再生大学との出会いから、活動を継続するようになった心境の変化を訊きました。

――2018年に起きた「平成30年7月豪雨」の災害直後の状況を教えてください。

週末だったので、仕事は休みでした。松山市では降水量がすごくて、警報を知らせるアラームが鳴っていましたが、自分のまわりでは被害はありませんでした。

ただ、生まれ故郷の宇和島市や知人のいる西予市野村町などの状況をSNSやテレビで見て、信じられない気持ちでした。

週が明け、被害状況を伝えるニュースを見てソワソワするばかりでしたが、松山市内で支援物資を集めている場所があると知り、とりあえず品薄になっていた水などを集めて持って行きました。

次の週末に、野村町へ社協のボランティアに参加しました。その翌週には、吉田町にいる同級生から「タオルなどがほしい」と聞いていたので持って訪ねました。

初めて自分の目で見る、いわゆる被災地で、知っている町が土埃（つちぼこり）にまみれている状況でした…。あの光景は忘れられません。

――幡ヶ谷再生大学との出会いを教えてください。

この災害で、初めて災害ボランティアに行きましたが、そのあとは「次の行動」に移れずにいました。

そんな中でも、出身地である宇和島市の復興の進捗状況が気になっていました。

ある日、参加した友人から幡再の存在を教えてもらったのがきっかけで、自主練に参加したのが最初でした。

――どうして幡ヶ谷再生大学の現場に行きたい、と思ったのでしょうか。

正直、ひとりだったら現場に行くことはできなかったと思います。

きっと友人と一緒だから行けたんです。私の感覚ですが、愛媛県民は、なんとなく控え目なところがある気がしています。私だけかもしれませんけど（笑）。

実際行ってみると、現地の方やずっと参加していた方からも、すぐに仲間として受け入れてもらえたのはうれしかったですね。

――現地ではどのような作業から始められたのでしょうか。

高田さん（P.43）の園地でみかんの収穫でした。子供のころからみかんの園地は身近な風景でしたが、国道を通るたびに「玉津地区はすごい傾斜で、どうやってみかんを育てているんだろう」と思っていましたが、「まさか自分がその園地で作業することになるなんて」と少し不思議な気持ちになりました。

被災後は摘果などの手入れが間に合っていなかったところに、台風が直撃して実がほとんど落ちていました…。

園地は傾斜があるのに転がらず、足元には避けることができないほどの落ちたみかんで埋め尽くされていました。根元の土が大雨で崩れ、斜めになりながらも実を付けている木もあって…。

「これは、大変だな」と思いましたが、みかんの収穫を一つひとつ終えていくにつれて、なんとも言えない達成感がありました。

――作業で心がけていたことなどがあれば、教えてください。

私たちの作業は、農家さんたちに手間や負担を強いるので、「しっかり作業をする」のはもちろんですが、そんなことを感じさせない朗らかな農家さんたちで助かっていますよ（笑）。

現場では終始楽しくお話しを聞かせてもらいながら作業していました。

現在は現地のルールもあり、みかん作業は無償ではなく、柑橘倶楽部さん（P.49）を

通じて果実やジュースを「作業に入った対価」としていただいています。

毎年、農家さんが手入れを続けて、やっとみかんが実るわけなので、丁寧に収穫に携われることができれば、と思っています。

――何度も現場に通われていますね。その理由はどういったものだったのでしょうか。

何度も通っていると、被災地が復興するまでに時間がかかることや、就農者の高齢化などの側面も見えてきました。

玉津地区は若い農家さんが多いとはいえ、全国同様、高齢化を顕著に感じます。

それに加え、園地が被災して耕作を辞めてしまうことも心配されるなか、「産地を守ろう」と立ち上がった玉津柑橘倶楽部さんの想いと行動力がすごいなと考えていますし、微力ながら関わりつづけられたらと思っています。

それに、いつも農家さんたちのたくましさには驚かされています。

畑や農道はまだまだ復旧されてないところも多いので、そこに活動で作った土のうが役立つのもうれしいです。

それに参加する仲間や、その土地で働く農家さんたちに会いたい気持ちが大きいと思います。

受け入れ体制を整えてくれる玉津柑橘倶楽部さん、優しく迎えてくれる農家さん、体力的にも精神的にも大変なときもありますが、それも含めて、みんなでワイワイと楽しく作業しています。

そんな触れ合いが私の癒やしになっています。

――作業を通じ、大変だったことを教えてください。

私だけじゃなく、ほかの愛媛自主練メンバーもほとんどだったと思いますが、この災害が初めての現場だったので、土砂出しをどうしたらいいのか、土のうの縛り方も積み方も知らない状態でした。

経験ある他県の自主練の幡再生に教えてもらい、「幡再」の繋がりに感謝しています。

――園地の急斜面はすごいですよね。地元のご年配の方は、ひょいひょい登って行きますよね。あれは慣れるものなのでしょうか？

急傾斜は、何度か行くと慣れますよ。とはいえ、今も滑るときは滑りますけどね（笑）。

――読者に一言あればお願いいたします。

愛媛県はこれまで大規模な災害のない土地でした。これまで全国で起きた災害や「平成30年7月豪雨」でも、崖崩れや浸水の状況が報道されるたびに「私なんかが行っても…」と考えていました。

でも実際に現場に行くと、目の前のスコップひと掻き、土のうひとつからなんだ、と分かりました。

そのひとつひとつが集まって、大きな力になっているんだと感じることができました。私もまだまだ経験不足ですが、一歩踏み出して、幡再に参加して良かったと思っています。いつ身近で災害が起こってもおかしくない昨今、現場へ行って感じること、できれば何度も行って考えることは自分のためにもなるかなぁ、と思っています。

愛媛自主練は引き続き、仲間を募集しておりますので、ぜひ現場で会いましょう！

WORK SHOP #EHIME

土のう

災害に役立つ ワークショップ 愛媛編

「平成30年7月豪雨」は
急斜面でミカンを育てる愛媛県にも甚大な被害を与えました。崩れた法面（のりめん）の応急処置にたくさんの土のうが用いられました。

初期段階

土のう袋は中身を詰め過ぎず、
6～7割に抑えることを周知徹底。

初期段階

当初は土のう袋に土を
入れるのにプラスチック製の
ペール缶を用いていました。

最終段階

ペール缶は丸いので、土のう袋が滑り落ちてしまったり、プラスチック製は劣化で割れてしまうため、その後はスチール製の一斗缶を採用しました。

一斗缶を採用したことで、大量生産できる“グッズ”がインターネットで売っていることが発覚。非常に高価だったため、「玉津柑橘倶楽部」が類似品を作成。

効率的かつ大幅な作業時間短縮での完成が実現しました。

「平成30年7月豪雨」支援活動
岡山編

04 岡山

真備（倉敷）

直近の人口：20,717名
死者・行方不明・負傷者：57名
避難者数：677名
ボランティア：約88,000名

（参考資料）
平成30年7月豪雨災害支援情報（倉敷市役所）：
http://www.city.kurashiki.okayama.jp/32987.htm

平成30年7月豪雨災害からの 復旧・復興ロードマップ（岡山県）：
http://www.pref.okayama.jp/uploaded/attachment/248192.pdf

2018年6月28日から7月8日にかけて、台風7号および梅雨前線等の影響により西日本を中心に全国的に広い範囲で集中豪雨が襲い、甚大な爪痕を残しました。
幡ヶ谷再生大学は発生直後から現地入りし、被害に遭われた方たちとともに活動を行いました。
災害直後の様子、「幡再」との出会い。ともに過ごした日々。変わりゆく感情。
今後起こりうる災害への提言、未来への想いを話していただきました。

「水害で離れてしまったみなさんが、元気に楽しく過ごせることを願っています」

瀬本好恵
岡山県出身
／岡山県在住
無職

幡ヶ谷再生大学の真備での活動拠点となった瀬本さん宅は、当時、岡山自主練の“幡再生”の集合場所になっています。
これまで災害に見舞われなかった真備を襲った「平成30年7月豪雨」について、訊きました。

――2018年に起きた「平成30年7月豪雨」の被災直後の状況を教えてください。

土砂降りの雨が降り続いて、止む様子もないので心配していました。7月6日の午後11時ごろだったと思いますが、「ドカーン！」と大きな音がして…。

最初は雷だと思ったのですが、なにかちょっと違う音でしたね。翌日、我が家から5キロほど離れた総社市にあるアルミ工場が水に浸かって、水蒸気爆発したと聞いて驚きました。翌朝5時ごろですかね。１本の電話で目を覚まし、カーテンを開けるとそこに今までの景色はなく、一面泥水で…。

周辺の家々はほとんど2階まで水に浸かっていて、住人の方々がそれぞれの窓からタオルなどを振って助けを求めていました。

やがて、救助のボートが来て、みなさんを乗せて、少し小高い丘へと運ぶことを繰り返していました。その光景を私はただ呆然と見つめていました。

少しすると、ご近所の男性が山づたいに来られて、「すみませんが、ご飯を炊いていただけないでしょうか？」と言われ、まだ水道から水が出ていたので、慌ててご飯の支度をしました。

――それはどのような事情から、お願いされたのでしょうか。

近くのお寺に避難された方がたくさんおられて、食べるものがなく救援物資も届かない、ということでした。

そこで、ご飯を炊き、おにぎりを作ってお寺に避難しておられる方々に息子が渡しに行きました。

被害が少なかった家は、ご飯を炊いてはおにぎりを作って届けに行っていましたよ。
そのうち水道から水が出なくなり、お米が炊けなくなって困っていたところ、我が家にも救援ボートが来るようになりました。

やがて水が引いて、数日後にやっと車に乗って、迂回しながら近くの街へ買い物に行けるようになりました。

――幡ヶ谷再生大学との出会いを教えてください。

私の担当医だった先生に紹介してもらったことです。

ただ、我が家は少し高台のため、家屋の被害は少なかったので「近隣のひとり暮らしや高齢者世帯で、片付けに困っている方がたくさんいらっしゃいます」とお話しし、活動の拠点を探しておられたので、場所を提供しました。

――どのような活動から始められたのでしょうか。

まずユカリさんが避難所からペットボトル

の水を数ダース運んできてくれました。

避難所には救援物資があったのでしょうが我が家の近隣は高齢者の多い地域なので、避難所に行くのが大変でしたから。

そのあと、ユカリさんが近隣の家々を回って、いろいろと相談しながら、我が家の車庫を休憩所にして、活動をしてくれていましたね。

――印象に残っていることを教えてください。

みなさんに来てもらったあの夏は、いつもより暑かったです。

ボランティアのみなさんの熱中症が危ぶまれたので、活動の日は大きな発泡スチロールの箱に氷を敷き詰め、冷たい飲み物を入れて参加者へ配りました。

氷は貴重だったので、残った氷水にみなさんの首に巻いているタオルを浸しては絞って渡しました。手が冷たくなるほど（笑）！

多いときは40人くらい来てくださって、みなさんのトイレのたびに何度も高台にある家と車庫を往復しましたよ。

――ご自宅までの石段を何度も往復されたんですか？ ヘトヘトになったんじゃないですか？

体は頑丈なんですよ（笑）。疲れは不思議と感じなかったです。それに全国からいろいろな人が集まって下さって、自分とは関係のない街のお世話をしてくれるわけでしょ？そのことに感謝していましたので。

でも、みんなが帰った夜は、動きたくないくらいヘトヘトでしたけどね（笑）。

――現在の真備はどのような状況でしょうか。

やっぱり引っ越してしまわれた方が多いですね。どこを眺めても、ですね。

高齢の方は、都会にいるお子さんのそばへ行かれたり、老人施設に入られたり。住人は半分になりました。

家屋も建て直したご家庭もありますが、更地にして引き払ったご一家もあって、寂しくなりました。

――この災害を通じて、ご自身が感じたことをお願いいたします。

今回の原因になった小田川の洪水は100年前にも起きていて以前から危惧されていたと、あとになって聞きました。

前もって対策がとられていたら被災は免れることができたのではないか…と、住む人のいなくなった土地を見て、残念に思うときがあります。

そういう弱点を突くように、災害はふりかかるんですね。

ただ、そう思うのは、少し落ち着いた今だからであって、あの時はただ目の前のことで精一杯でした。

今はただ、今回の水害でこの土地を離れてしまったみなさんが、新しい地域で元気に楽しく過ごせることを願っています。

「友情と言ったらおかしいかもしれないけれど「絆」みたいなものを現在でも感じてますよ」

稲田賢一
岡山県出身
／岡山県在住
大工

「平成30年7月豪雨」発生後、幡ヶ谷再生大学の活動を見守ってくれた稲田さん。
活動を通して生まれた“幡再生”との絆。
被災して気づいたこと、今からでもやるべきことを伺いました。

――2018年に起きた「平成30年7月豪雨」の災害直後の状況を教えてください。

この辺りは一面、湖だったよ。我が家は2階まで水が上がって来たね。

それから、近所の知っている人のお宅へ伺って、片付けの手伝いをしていましたね。

――真っ先にご自宅を片付けなかったのですか？

自宅の片付けは最後だったよ。最初にやろうとしたんだけれど、女房もいたし弟夫婦が手伝いに来てくれたからね。

――幡ヶ谷再生大学とはどのような接点があったのでしょうか。

ユカリさんかな。あの人がこの辺りをくまなく回ってくれたから。

「なにかお手伝いしますよ」、「ゴミがあったら片付けますよ」とか、一軒、一軒丁寧に訪ねて回ってくれたんですよ。

それから自宅のゴミ出しをやってもらって、掃除なども手伝ってもらってからの付き合い

になるかな。

――思い出に色濃く残っていることなどはありますか？

近所に知り合いのMさんのお宅が箭田（やた：真備町）にあって、そのお宅を幡再にお願いしたときですね。

お願いしたらすぐに6～7人集まってくれました。文句も言わずに。本当、いろいろ助けられたんです。

連絡したらすぐに駆けつけてきてくれ、嫌な顔をせず、お願いしたお宅は必ず終わらせてくれましたね。

お願いした4軒を1日で片付けてきたのには、本当に驚きましたよ。

――水害があり、さまざまなボランティアさんたちと出会ったと思うんですけど、現在まで交流がある団体はあるのでしょうか。

最初に頼んだ団体は9時から14時とか15時で終了していましたね。あの夏は暑かったですから、仕方のないことなんですけどね。でも幡再は9時か10時に集まって、17時か18時くらいまでやってくれるんですよ。遠いところからも来てくれてね。

島根県から来てくれたり、東京や北海道からも。もちろん県内からも。話をしていたら、ほとんどの方が遠くから来てくれていて、驚きましたよ。

うれしかったし、励まされた。幡再はすごい力を持っているんだなーと思いました。

「人と人との絆」っていうのかね。そういうものを強く感じました。

――その「絆」は昨今、希薄になりつつあるとも言われていますね。稲田さんにはその「絆」を感じることができたのでしょうか。

それは幡再にはあるよ。「人対人」みたいな付き合い方というのかな。普通の一般人とは違うよ。人間が。

なんていうか…昔の人みたいな。知らない人でも気さくに「あれしてよー」って言ったら「はーい」って元気に返事してくれてね。

昔の近所にいる、おじさんおばさんみたいな感じかな（笑）。普通はそんなことはしないよ。いくら「ボランティアです」って言っても、敬語を使われれば、こっちは敬語で返さないとマズイでしょ？ でも、忙しいときって敬語なんて使えないからね（笑）。

そういう、友情と言ったらおかしいかもしれんけど、「絆」みたいなものは現在でも感じていますよ。

――現在、日本では災害が頻発していますね。被災を経験した当事者の視点で用意しておいたほうが良いもの、などアドバイスがあれば、お願いしたいです。

用意しておいたほうが良いものは…心構えだと思う。

家のことはなにも考えずに、すぐ最寄りの人を連れて逃げる。これに尽きる。

この辺りは年寄りが多いから。近所の人たちに声をかけて、高台に避難した。

近所の人と逃げる。あとはなにを守ると言っても、命だけ守れば良いことだと思うよ。

息子夫婦には1番に『逃げろー！』と叫んだ。小さい子供がおるからね。

溢れてくる水を見ていたら、勝手にそう叫んでいた。そのあと僕らが、近所の人たち連れて避難したよ。

死んだら、どうにもならないからね。

――九死に一生を得る経験をされたわけですが、その悦びを強く感じたことはありますか？

そりゃありますよ。仕事ができることです。それから、家族に誰も怪我がなかったことかな。それだけですよ。

自分に負けたら絶対にダメ。自分がしっかりしていたら、なんでもできるからね。

お金がなくても、自分が一歩踏み出さなかったら、家族にとっても大きな迷惑がかかるからね。

――読者に一言、お願いいたします。

命を第一に考えてほしいですね。「なにかあったらすぐ逃げなさい」と訴えたい。我慢せずに。テレビなんかでもやっているけれど、足が悪い人は早めに避難させないと、と思いましたね。近所の人、最寄りの人との連帯感が重要になるかな。

連帯感を高めるには、地域で挨拶を習慣づける、とかで違ってくると思います。

元気な人は「最寄りの誰々さんは、私の班で連れて行く」とか役割を決めておいても良いんじゃないかな。

毎年、日本ではなにかしらの災害があるでしょ？ だからもう、大げさな話じゃないと感じています。

個々に逃げるんじゃなくて、「近所の人もみんなで一緒に逃げましょう！」と心意気みたいなものは持つべきだと感じています。とくに近隣のお年寄りの存在を把握しておく必要はあるのではないでしょうか。

被災して、いろんな人から「誰かを置いて逃げて、自分が助かったとしても一生後悔する」という話を聞いて、まず「全員で逃げる」ことが大事だし、大切だと感じました。

その気持ちを一人ひとりが持つことが、一番大切なんじゃないかなと思う。

「被災してマイナスだった土地に桃の樹を植えて、『復興の桃』と呼ぶようにしました」

西岡照幸
岡山県出身
／岡山県在住
農家

岡山県でも古くから桃を育てる桃農家の西岡さん。
現在でも幡ヶ谷再生大学とともに活動を続ける同氏が体験した「平成30年7月豪雨」はどのようなものだったのか。
そこから生まれた出会い、現在楽しみにしていることを訊きました。

――2018年に起きた「平成30年7月豪雨」の災害直後の状況を教えてください。

我が家は比較的、そこまで被害は受けませんでした。ただ、住んでいない家と蔵は、土砂が流れ込んでしまいました。

とくに蔵は土砂に押し出されるように道路側に傾き、今にも倒れそうな感じになっていました。

――幡ヶ谷再生大学とはどのような接点があったのでしょうか。

土砂が流れて、母屋と蔵に電柱が２本突き刺さってしまったんです。その内の１本がNTTのもので。

到底動かすこともできない大きさでしたので、NTTに電話して、来てくださった現場監督が幡ヶ谷再生大学のMさんでした。

そのときにMさんから「下に土砂がいっぱいあるから大変ですね。どのように片付けるのでしょうか」と聞かれたので「重機で何年かかるか判らないけど、自分でぼちぼちとやります」と答えたら、「こういう状況に詳しい人がいるから聞いてみます」と言ってくださり、紹介されたのがユカリさんでした。

――そこから泥出しの日々だったんですね。

その土砂をボランティアの方やユカリさん、全国から来られた方々が、トラックで私の田んぼの中に土を運びました。

さらに残った土砂は、なにも作ってない自分の土地に何日かかけて、みんなで運びました。その場所にこの辺りの名産になっている桃の樹「清水白桃（しみずはくとう）」を植えました。

被災して、マイナスだったこの土地に「少しでもプラスになるように」とユカリさんが「復興の桃ですね」と言ってくださり、みんなでそう呼ぶようにしました。

――岡山県は桃の名産地として有名ですね。「清水白桃」は代名詞的な存在なのですか？

そうですね。桃は、偶然に派生するものと品種改良したものがあります。品種改良するものは、研究しながら交配したり、種をとって、植えて、商品としての桃になるには10年から20年もかかる桃もあるようです。

清水白桃は、高級品として日本中でも有名になっていますが、もともとあの水害で崩れた村の集落で偶然、生まれた桃なんです。

現在は、この地域は芳賀という地名になったんですが、昔は清水と呼ばれており清水の名を取り「清水白桃」という名前を付けたようですね。

――活動を通じ、思い出に残っていることがあれば教えてください。

来てくださったみなさんが泥まみれになって、一生懸命作業する姿を見て、本当に感動しました。

見ず知らずの人のためにみなさんが気持ちよく、笑顔で作業してくださいました。全国からいろんな人が来てくださっていろいろなお話ができたり、昼も一緒に食事させていただいて、ともに笑った日々は財産です。

先日まで、私はお菓子屋を営んでいたんですが、幡再生がたくさん買ってくれまして。「本当にそんなに食べるの？と思うくらい買ってくれる人もいました。

なんというか、心が洗われた気分になりました。店舗に、片平里菜（Hatasai Magazine Vol.5 P.20）さん、MAN WITH A MISSION（Hatasai Magazine Vol.6 P.34）の方にも来ていただいて…あの水害がなければこんなことにはなっていなかったはずですから、活動に来てくれたすべての方に、この場をお借りして御礼を申し上げます。

――読者に一言お願いいたします。

全国の、それも遠いところからも来ていただいたことに感謝しております。それに対して、私はなにを返してあげられるのかな、と思っています。

我が家より、被害が大きかった方のほうが多かったですから。

そんな私たち家族を助けてもらって、してもらうばかりで御礼ができていない現状に申し訳なさや心苦しさも感じております。

この災害がきっかけではありましたが、幡ヶ谷再生大学が心の支えになっています。人の心の温かみというか、「人に対する思いやりを持っている方々が、まだ日本にもこんなにおられるんだなぁ」と感動しております。

このようなボランティア活動をされる方々がおられる限り、この国にも希望が持てるなぁと思っています。

コロナが落ち着いたら、幡再のみんなで植えた桃を見にいらしてください。今年で植えてから3年目になります。

樹がよく育っています。そして、すごく成長が良い。コロナじゃなければ、みなさんに集まってもらって、桃狩りしてね、そのまま持って帰ってもらおうと思っていたんですが…。

それが実現する日を楽しみにしております。

「幡再のみんなで食べたお昼ごはんの時間が『ここで働きたい』と思えるきっかけでした」

Y(匿名)
岡山県出身
／岡山県在住

幡ヶ谷再生大学の活動がきっかけで、訪れた「放課後等 デイサービス ホハル」に転職したYさん。
「平成30年7月豪雨」で初めて参加した復興支援ボランティア。
変化した「被災地」の見え方や心の変化について訊きました。

――2018年に起きた「平成30年7月豪雨」の災害直後の状況を教えてください。

私の地域は幸いにも被害は免れました。でも、もう少し長く雨が降っていたら…と思うと恐怖を感じました。

地元が被災したこともあり、「なにかしなきゃ」と思っていました。

――幡ヶ谷再生大学とは、どのような接点があったのでしょうか。

ORANGE RANGEのBASSのYOHさん（Hatasai Magazine Vol.5 P.21）がどの被災地にも赴いて、幡再と活動している様子をSNSに投稿していましたので、知ってはいました。

でも「大学？ って…。でもNPO法人だし…、復興支援もやるし、農業もやるし、どういう団体なんだろう…」という印象でした（笑）。

真備の災害では、それまで災害ボランティアに行ったことはなかったのですが、地元の音楽バンドの方のご自宅が被災されて、お手伝いに行ったのが最初でした。

作業が一旦ひと段落し、そのお宅の方から「もう大丈夫」と言われ、社協のボランティアに行こうと思っていました。

そんなときにORANGE RANGEを通じて知り合った友人が、幡再のボランティアに行っている姿をSNSで見て、その行動力に心を動かされました。

そのことがきっかけで、私も幡再に参加しようと思いました。

――すぐに行動へ？ 素晴らしいじゃないですか！

最初はとても躊躇しました。自分ひとりで行動するのって、とても大きな力が必要だと思います。

なにが必要で、なにを準備して、どうしたら良いのか？ などいろいろ調べたりしていました。

そんなとき友人が参加している幡再に行ってみようと思ったんです。

幡再を知ったのはTwitterですが、幡再に行こうと思ったのはその友人がきっかけだったので感謝しています。

――最初はどのような作業を行ったのでしょうか。

ゴミ出しですね。ひたすら家の中から家具を出していきました。

――作業を通じ、感じたことを教えてください。

やっぱり、よく言う「行ってみなければ感じられない」、「分からないことだらけ」ということを痛感しました。

匂いでしたり、災害直後の移動の不便さとか、人々の表情などは今でも鮮明に覚えています。

――現在お勤めされている「放課後等デイサービス ホハル」は、幡ヶ谷再生大学の活動がきっかけで勤務するようになったとお伺いしました。

そうですね。幡再の活動のお昼ごはんを食べることになったんです。その炊き出しの場所が「ホハル」でした。

それまで、何度も通った道沿いの施設で、

幡再の活動もその周辺でやっていたのですが、ホハルの存在自体を知らなかったので、最初は「施設があるんだ」としか思わなかったです。

大きく言えば、幡再のみんなで食べたお昼ごはんの時間が「ここで働きたい」と思えるきっかけでした。

――具体的にどのような部分に惹かれたのでしょうか。子どもが好きとか、になりますか？

子どもには興味はありましたが、自分が子どもと関わる職業に勤めると思っていませんでした（笑）。

ただ、ビックリしたんですよね。子どもたちの元気な姿にこっちまでパワーを貰えたというか…。

あの子たちも被災者で、水害に遭い、障がいがあるが故に避難所に入れなかった話など職員さんから聞いたんですが、そんなことを少しも感じさせない姿に強さを感じましたし、寄り添いたい気持ちになりました。

あとは職員さんを含めた、ホハルの雰囲気が好きでした。

――実際、働いてみてどうですか。

楽しいですよ（笑）。子どもの成長を見るのが幸せですね。昨日できなかったことが、今日できるようになったり、それこそ1年ごとに急成長していくんですよ。

そういう成長を見ていく、幡再の縁があって携われる仕事に就けたことは、本当にありがたく思っています。

――幡ヶ谷再生大学の活動で思い出に色濃く残っていることなどはありますか？

2019年2月24日に真備自主練で「ホハル」を借りて、真備の子どもたちと一緒にオリジナルフラッグ作りをしました。その日はYAHIRO LABさん（岡山県新見市にある新見公立大学の災害復興支援チーム）と一緒にイベントをしました。

フラッグは茨城県常総市の水害（Hatasai Magazine Vol.6）で水没し再生したリユースTのハギレも使用しました。

完成したフラッグは幡再のブースにも飾っていただきました！

Twitterにも掲載していますが、いろいろな"繋がり"を強く感じる1日でした。

――ご自身が「平成30年7月豪雨」を機に大きく変わったことがあれば教えてください。

幡再とホハルを通して、成長したいなと思っています。少しずつではありますが、ありがたいことに「成長したね」、「ありがとう」と言っていただけることが増えてきました。

そういう言葉をかけていただくと「やって良かったー！」と心から思えます。

それは、子どもたちの成長を見たときも同じです。

ユカリさんがおっしゃっていた言葉で、表現は少し違うかもしれませんが、「今は辛くて苦しいかもしれないけど、ちょっと踏ん張って、我慢して、乗り越えたその先に見える景色がある」という言葉が頭に残っていて。

その"景色"って、このことなのかなと思えました。

――現在、日本では災害が頻発していますね。地元が被災した経験を持つ当事者の視点でアドバイスがあれば、お願いしたいです。

私は幸いにも被災は免れたんですけど、地元が被災したときに「助けたい」と思う方ってたくさんいると思うんです。

でも、私みたいに一歩踏み出せない方のほうが多いと思うんです。今回の災害で少しだけ勇気を出して一歩を踏み出したら、本当に誰かの助けになるんだな、と強く感じました。たとえば、被災された方と話すだけでも、その方は元気になってもらえるんですよ。

あと、地域との連携が重要だと感じました。

「あそこの家はお年寄りがいる」とか「この家はこういう方が住んでいる」という情報が必要だと感じました。

会ったときに会釈や挨拶をするだけでも、有事の際は大事になってくると思いました。

ホハルでも、会議で地域との密着は議題に上がりますし、私自身もそう心がけています。

――読者に一言お願いいたします。

もし今後、被災地が気になったら、とにかく訪れてほしいです。

その場所が遠かったりで、行くのにお金がかかるとは思うんですが、少しでも気になったらぜひ訪れてみてください。

1カ月経ったら、別の景色になってしまうんですが、そのとき、そのとき、で感じるものはあるように思います。

たとえ、期間が開いても被災地には訪れてほしいですね。何かしら感じるものはあると思いますので。

YAHIRO LAB

「被災したからこそ幡再の仲間たちと出会い、繋がることができました」

Y(匿名)
愛媛県出身
／岡山県在住
児童指導員

「平成30年7月豪雨」で九死に一生を得たYさん。
災害を通じて学んだこと。現在でも家族総出で参加する幡ヶ谷再生大学の活動と、芽生えた絆について訊きました。

――2018年に起きた「平成30年7月豪雨」の災害直後の状況を教えてください。

私の家族はアパートの2階に住んでいました。避難指示も出ていましたが、時間も時間だったので逃げ遅れてしまいました。

あの水害で2階もほぼ浸かってしまって、家族全員で屋根に登って救助を待ちました。

――屋根に、ですか？ どのように登られたのでしょうか。

パニック状態で、とにかく必死だったのであまり覚えてはいませんが、ほかの住人とも助け合って全員で屋根の上に逃げました。

――幡ヶ谷再生大学とはどのように出会われたのでしょうか。

10月ごろにMONGOL800（沖縄県出身の音楽バンド）のキヨサク（Vo）さんのLIVEが真備でありました。

そのLIVE会場で子どもたちが遊んでいるところに、幡再の人たちがいて、子どもたちと一緒に遊んでくれたんですよね。

そのときに幡ヶ谷再生大学の話をしてくれたんですけど「大学？ 大学生が活動しているのかな」と思っただけでした。

それから何日か経って、「ホハル（P.70）」にMAN WITH A MISSIONの方（Hatasai Magazine Vol.6 P.34）が来てくれいた日でした。

たまたま、被災で知り合った方から「ホハ

ルに行けば、なにかもらえるよ」という話を聞いていたこともあって、ちょうど真備にも用事があり、「ホハル」に私たち家族で伺いました。

そこに先日会った幡再の方たちがいて、子どもたちが「あー！」って発見して喜んでいましたね。

――よほど嬉しかったんでしょうね。

そうだと思います。そのときも野球とか一緒にやってもらって、子どもが「もっとあのお兄ちゃんとお姉ちゃんたちと遊びたい」、「僕も活動に行きたい」と言い出して、参加することになりました。

毎回、幡再の方たちが「この日に活動あるよー」と教えてくれて、子どもたちも「幡再のお兄ちゃんとお姉ちゃんたち」に会えることを喜んでいましたね。

それから毎回、子どもたちと一緒に活動現場に行くようになりました。

――最初はどのような作業を行ったのでしょうか。

私たちが参加したころは10月だったこともあり、家屋の泥出しなどの作業はほぼ終わっていて、家の掃除だったり、畑の草取りなどを中心にやっていましたね。

――とくに思い出に残っている１日があれば、教えてください。

私の子どもは人懐っこいんですけど、どこか人見知りなところがあるんですよ。

小学２年生だった当時、上の子が親と離れてひとりで幡再のみんなに新見市の現場(2019年～)まで連れて行ってもらった日があったんです。帰ってくると「一生懸命やってきた！」と本人も言っていましたし、なにより喜んでいましたね。

作業に行ったあの日は、子どもが頑張って作業している姿を、幡再の仲間たちが写真に撮ってくれて、朝から随時私に送ってくれた

のもうれしかったです。

――お子さんが幡ヶ谷再生大学のことを学校に提出する「作文に書いた」とお聞きしました。

たしか夏休みの宿題だったと思うんですけど、書いていました。

題名は忘れてしまいましたけど、課題が家庭や地域のことを書くという内容だったので「ボランティアのことを書こう」と言って、書いていましたよ。

――どのような内容だったのでしょうか。

「ボランティアではどういうことをしている」から始まり「ボランティアは困っている人を助けることだから、僕もそういう人になりたい」と最後に書いていましたね。

――現在、日本では災害が頻発していますね。被災を経験した当事者の視点でアドバイスがあれば、お願いしたいです。

豪雨災害は、雨が降っていれば夏でもとても寒いです。体温がどんどん奪われて体が震えるほど極寒でした。もし、「暑い」と思っても、防寒具は持って家を出たほうが良いと思います。

何時間も雨に打たれる場合もありますので…。

――そうした事態を踏まえて、用意しておいたほうが良いものとかはありますか？

屋根の上や雨に打たれる状態になりそうな場合は、ゴミ袋ですね。ちょうど、東日本大震災で被災された方が同じアパートに住んでいて、教えてくれました。

私たちは、屋根の上で寒くて凍えていたのですが、その方が「ゴミ袋を首の部分だけ穴を開けてかぶれば温かいし、濡れないから」と屋根に避難した全員に配ってくれました。

――さきほど、避難しているときはパニック状態と仰っていましたが、その状況下でも「必要なもの」は瞬時に頭に浮かぶものなのでしょうか。

あのとき、私は「死ぬかもしれない」と思っていました。死を目の当たりにして息をするのも精一杯な状態でしたし、過呼吸に近い状態でした。

そのとき「これがあれば生き延びられる」と思ったのが、タオルと浮き輪でした。

――浮き輪ですか？？

どんどん上がってくる水を見て屋根まで水で浸かったら、「子どもを浮き輪に乗せて何とか助けないと」と考えました。

テレビなどでは「冷静な判断」、とよく言いますけど、危機が迫った状態では冷静な判断は難しいと思います。

――九死に一生を得る経験をされた「平成30年7月豪雨」だったと思いますが、Yさんにとって、この災害はどのようなものだったのでしょうか。

災害は多くの物を失い、当たり前の生活を一変させます。

当時は気づかないうちにいろいろな感情が入り乱れて不安定な時期もありました。でも、悪いことばかりではありませんでした。

被災したからこそ幡再の仲間たちと出会い、繋がることができました。私たちの家族は恵まれていると思います。

ある人が「家や町が復興することも大事だけど、心の復興も大事」と言ってくれたことがあります。

悲しみだけでなく、楽しさを共有してくれた幡再のみなさんには本当に感謝しています。私たちは、そんなボランティアの方、友達、先生、地域の方、いろんな方に助けていただいて「今」があるので、私たちができることは小さなことですが、幡再のみんなのように私たち家族も誰かに寄り添える小さな力になれたらなと思っています。

マーピーふれあいセンター
倉敷市立真備図
MISSION IMPOSSIBLE
WES
桜ヶ谷青年大学

「『お前いっつも休憩してんな！』とか言われるくらいの明るい『現場』で良いと思っています」

Racco
岡山県出身／東京都在住
IdolPunch：Vo／(有)ノラネコ商会 代表取締役
RACCOS BURGER・RACCOS BAR等経営
真備町産焙煎使用豆菓味噌
「飯取物語」製造販売等

2011年3月11日に発生した「東日本大震災」以降、日本全国で頻発する災害地に自身が作る「RACCOS BURGER」を届けるRaccoさん。
その動機、継続理由、災害が起きた直後に心がけていること。
地元「岡山」が被災地になった「平成30年7月豪雨」ではどのような心持ちだったのかを訊きました。

――2018年に起きた「平成30年7月豪雨」の災害直後の状況を教えてください。

豪雨と重なるタイミングで3時間くらい遅れて岡山に到着したら、岡山市内を流れる川の氾濫危険水位を超えた避難勧告のメールが鳴り続けていました。

翌朝、結局岡山以西に運行ができなかった新幹線に残って、車内泊していた広島のガイ（HARDCORE PUNK BAND「ORIGIN OF M」Vo）くんと会って軽く話をしました。

その日はRACCOS BURGERを休みにして混乱した情報を精査しながら物資を集めて、道を塞がれて物流が止まっている高梁市へ物資を持っていくことにしました。
それが冠水被害を受けたばかりの高梁市へ届いた最初の支援物資だったらしく、うれしかったですね。

津波被害と違って、生活していた雰囲気がそのまま泥を被っているような感じで、建物は基礎からズレてるワケでもないので、施主はリフォームなのか、建て替えなのかの判断がむずかしいと思いました。

なので、床抜き乾燥の作業はリフォームを判断した方の物件のみをやっていました。

――これまで、たくさんの被災地で活動されてきたRaccoさんですが、地元が被災地になったときの心境をお聞かせください。

バタバタしていたこともあって、あまり「地元だから」とかは考えてなかったですね。でも「いったい、今まで東日本大震災から何やってきたの？」と言われないようにしなきゃ、と思ったりしていました。

――それはどうしてでしょうか。

実際復興支援に纏（まつ）わるたくさんの人たちと苦楽をともにして、常に悩みながら動いてきたのは事実ですし、これまで一緒に活動してきた仲間たちに泥を塗ることになるとも思いました。

――どのような機会から炊き出しや、復興支援活動に携わるようになったのでしょうか。

東日本大震災での活動に関しては、被災した友人に「Raccoちゃんのハンバーガーが食べたい！」と言われたからです。

そんなある日、岩手県の避難所で炊き出しをしていたとき、地元の子どもに「次、いつ来るの？」と言われたんですよね…。

つい「またすぐ来るよ」と答えてしまったので、すぐに行きました。

結果、それから毎月のように岡山から岩手まで行くことになってしまったんですけどね（笑）。

――これまで、何度も全国各地の被災地などに通われていますね。その原動力はどういったものだったのでしょうか。

なんだろ。モテたいな、と！（笑）。

一幡ヶ谷再生大学の各地の現場、岡山の現場でもたくさんの炊き出しをしていただきました。思い出に残っている現場はありますか？

現場での思い出というより、全体的に人海戦術期を終えても被災された方とパーソナルな付き合いを続けています。

サポートしながら、新しい楽しみ方の提案

をしたり。関わりを継続しやすい環境を続けている感じは、良いなぁと思っています。

――RaccoさんのSNSは有事の際、「的確」と定評があります。ご自身で注意していることがあれば、教えてください。
また、どのような経験から情報過多にならないようにされたのでしょうか。

いやいや、そんなことは決してないですよ。でも、そう思われているのならうれしいですね（笑）。

いつも考えているのは、初めて支援に参加する人たちのことを想像しています。

その人が「やってみようかな」と思える雰囲気づくりを心がけていますね。

自分自身は大したことができるわけではないので、できる範囲のことだけをやるようにはしています。

――これまでたくさんの被災地で活動してきたRaccoさんから、被災地で生かせる「技術」などがあればお願いいたします。

導線の確保だと思います。たとえば、瓦礫（がれき）出しのときなどは、導線や足元の安全確保を真っ先にやったほうが良いですね。導線さえしっかりしていれば、安心して大きいモノも運んで行けますからね。大事だと思います。

あと、すぐ休憩できる現場の雰囲気づくりも大事に感じますね。
「お前いっつも休憩してんな！」とか言われるくらいの明るい「現場」で良いと思っています。

――読者に一言、お願いいたします。

なんか良いヤツと誤解されがちですが、俺自身の夢はハワイのビーチとかでトロピカルドリンクを飲みながら水着美女とチャラチャラすることです！宜しくお願いします！

【平成30年7月豪雨】
幡ヶ谷再生大学活動記録写真
7/19 岡山真備地区

撮影:三吉ツカサ(Showcase)

JOIN US!

活動の参加方法

幡ヶ谷再生大学

復興再生部の活動

活動の募集はTwitterとwebサイトにてお知らせしております。その際、日時・集合場所・内容・用意するもの、を詳細に記しておりますので、ご確認後、ご参加をお待ちしております。

各地自主練の活動

活動の募集はTwitterにてお知らせしております。
各地自主練はP.84〜をご参照ください。

Twitter

Web

畠ヶ谷再生大学復興再生部

石巻市南境自主練

石巻の年末年始の伝統文化「目玉木」に触れ、地元のお母さんたちとの会話から2011年に発生した東日本大震災の被災地の「今の姿」を感じる場を提供しております。
2015年11月より畠ヶ谷再生大学の活動を引き継ぐ形で自主練がスタート。
毎年11月に「正月飾りづくり」の募集を「石巻市南境自主練」のTwitterにて行っておりますので宜しくお願いいたします。
引き続き多くの方のご参加をお待ちしております。

畠ヶ谷再生大学復興再生部

岩手岩泉自主練

2016年8月に発生した台風10号の被害に伴い、現在でも有志が集まり自主練を開催しております。
現在も本活動と平行して「岩手岩泉自主練」のTwitterにて支援活動の募集を行っておりますので、宜しくお願いいたします。
引き続き多くの方のご参加をお待ちしております。

幡ヶ谷再生大学復興再生部

福島自主練

2014年8月より、「世間の風潮や感情に流されることなく思考し、判断」を掲げ、幡ヶ谷再生大学では福島県いわき市にある「生木葉ファーム」にて農作業のお手伝い、勉強会を開催しております。2019年11月より「いわき自主練」から「福島自主練」に名前を変え、猪苗代野外音楽堂でのソーラーパネル設営撤収、台風19号(2019年)の水害復旧支援、東日本大震災と原発事故のスタディツアーなど県内各地を視野に活動しております。

幡ヶ谷再生大学復興再生部

愛媛自主練

2018年7月に発生した「平成30年7月豪雨」は、西日本を中心に甚大な爪痕を残しました。幡ヶ谷再生大学では8月より、愛媛県南予地方に現地入りし支援活動を行っております。
現在も本活動と平行して「愛媛自主練」のTwitterにて支援活動の募集を行っておりますので、宜しくお願いいたします。
引き続き多くの方のご参加をお待ちしております。

幡ヶ谷再生大学復興再生部

大阪自主練

2018年6月に発生した「大阪府北部地震」に伴い、大阪府茨木市を中心に活動をおこなっていました。
2020年6月を最後に「大阪自主練」としての活動は、一旦お休みさせていただきます。
※P.31参照

幡ヶ谷再生大学復興再生部

九州自主練

2016年の「熊本地震」、2017年「九州北部豪雨」の支援活動を引き継ぎ「九州自主練」として活動を行っております。
本活動と並行して「九州自主練」のTwitterにて支援活動を募集しております。
現在は2020年に熊本県を中心に発生した「令和2年7月豪雨」の支援活動を行っております。
引き継ぎ多くの方のご参加をお待ちしております。

幡ヶ谷再生大学復興再生部

東海自主練

2018年7月に発生した「平成30年7月豪雨」は、西日本を中心に甚大な爪痕を残しました。同年「岐阜自主練」として岐阜県関市上之保地区にて始動。
現在は「東海自主練」に名称を変更し、Twitterにて支援活動や防災活動の募集を行っておりますので、宜しくお願いいたします。
引き続き多くの方のご参加をお待ちしております。

幡ヶ谷再生大学復興再生部

岡山自主練

2018年7月に発生した「平成30年7月豪雨」は、西日本を中心に甚大な爪痕を残しました。幡ヶ谷再生大学では災害発生直後より真備や芳賀に現地入りし、支援活動を行っております。
現在も本活動と平行して「岡山自主練」のTwitterにて支援活動の募集を行っておりますので、宜しくお願いいたします。
引き続き多くの方のご参加をお待ちしております。

幡ヶ谷再生大学復興再生部

長野自主練

令和元年に発生した「台風19号」は関東甲信越と東北地方に甚大な爪痕を残しました。
幡ヶ谷再生大学では災害直後より、長野県長野市の千曲川沿いを中心に支援活動を行っております。
現在も本活動と並行して「長野自主練」のTwitterにて支援活動の募集を行っておりますので、宜しくお願いいたします。
引き続き多くの方のご参加をお待ちしております。

幡ヶ谷再生大学復興再生部

関東自主練

2015年9月に発生した「関東・東北豪雨」で甚大な爪痕を残した茨城県での活動は、2017年7月に終了。
「常総自主練」から「関東自主練」に発展的改名し、2019年9月に発生した「台風15号」より関東地方で助け合える自助・共助の力を繋げていく所存です。本活動と並行して「関東自主練」のTwitterにて支援活動の募集を行っておりますので、宜しくお願いいたします。引き続き多くのご参加をお待ちしております。

編集後記

人の一生を「歴史」という大きな視点で見れば、後悔が付きまとうものだと思う。
「こうすれば良かった」など先に立たない後悔は、誰もが経験するところである。
学校の授業で学ぶ「日本史」は、人々の実生活を巨大化したものだと筆者は考えている。興味がなければ、すでに遠い記憶になっている日本史だが「本能寺の変」はおそらく覚えているだろう。
結果を知っている者からその歴史を見た場合、明智光秀の行動は暴挙、あるいは軽率にも映り、織田信長の油断に片付けられてしまう。
歴史ファンにとって、その答え探しはロマンだろうし、見識を深めるものだ。
本冊子に登場された方のお宅を初めて訪れたとき、他愛もない会話を重ねたのちに、天災により、えぐれた山肌に目をやった。
「幡再がおらんかったら、ここまでやってこれなかったやろうな…」と呟いた。
作成中、上記のエピソードの話をすると「それは書かんでもええやろ。そういうのは助けられた側の人間が大事に、心の奥に閉まってあるものだから」と前置きされた上で、「掲載するなら、誰が言ったか分からないように」と笑い、許可をいただいた。
また、これまでの冊子でも年配の方から、全国各地の幡再生の存在に感謝をいただき「日本も捨てたもんじゃない」と仰っていただいた。
今回も同様のことをお聞きしたが、ある方に掲載にあたり確認したところ「この表現は良くないんじゃないか？」と仰った。初めてのことだった。
「そうですか？」と聞くと、同氏は「現在の日本は『人』を見捨てるようになってしまった」とトーンを落として語った。
続けて「今の政府は弱い者を助けないじゃないですか！ 助けていますか？ 雇用はどうですか？ 我々の世代には非正規雇用なんかなかった。そんな言葉すらなかった」「能力がなければ、ダメなんですか？ みんな完璧ですか？ 違うじゃないですか！ それをみんなが補うように助け合うから、信頼が生まれ、人間としての能力も上がっていくんじゃないですか？」と畳みかけられた。
また、1986年から1991年までに起こったバブル期を例にし、話が進む。
先祖伝来の土地を売り物にした“バブル”を引き起こした世代は、国民全員がそれに加担したわけではなかったこと。
加えて、現代とは異なる"団結力"があった、と訴えた。
筆者はふと、1964年に開催された「東京オリンピック」を思い出した。
今から57年前に東京で開催されたオリンピックは「戦後復興の象徴」とされ、国民が大歓迎した。と、認識していたし、そう教えられてきた。
だが、その時代に東京で日々の生活をおくった方々から聞く"話"は以下の通りである。
オリンピック開幕直前の1964年6月、NHKは「あなたは近ごろどんなことに関心を持っていますか」という世論調査を行ったようだ。
すると、「自分の生活　11.5%」「家族、友人など　13.4%」「仕事、商売など　11.1%」「社会、経済、政治　33.0%」「趣味　9.4%」「オリンピック　2.2%」「ない、分からない、無回答　19.4%」という結果が出ている。
現在、同じ世論調査を行った場合、おそらくだが、似たような答えが返ってくるのではないだろうか。
もちろん、国民の生活水準は大きく向上したし、インターネットが普及し、1964年には信じられないほどのサービスを国民が日々、享受する時代になった。
では、そのことで人々にある本来の優しさや思いやり、または地域のコミュニティは向上しただろうか。
この冊子の中でも、有事の際に必要なことに「となり近所の連帯感」を訴える方が少なくなかった。
昨今では地域の行事ごとはなくなり、となり近所にどんな人が住んでいるのか、分からなくなった話は珍しいものではない。
激動の昭和が終わり、平成の終わりが近づいた2018年、これまで被災経験のなかった地域、もしくは100年以上も前に災害を経験した街を「平成30年7月豪雨」が襲った。
本冊子に登場した方々は「備え」も大事としたうえで、「命の優先」を訴えた。
生きることの苦労を根深く理解した発言を残し、「生きていればなんとかなる」と希望を感じさせる言葉を口にした方もいた。
将来的にこの天災は、学校の「歴史」の教科書に載るだろうし、すでに刊行物には掲載されている。教科書の中の「歴史」は1964年の東京オリンピックのように、“そのとき”しか記載されることはない。
“前夜”が載ることはないし、「その後」が載ることも恐らくないだろう。掲載されるのは、いつの世も結果のみである。
本冊子の中に「日本で『ここは大丈夫』とかってもうないんじゃないかね」という回答がある。
恐ろしい予想ではあるが、事実だ。
だからこそ、備えが必要になってくる。物質的にもだが、もっとも重要なのは「心」ではないだろうか。その備えさえあれば、「こうすれば良かった」という後悔は、小さなものになるはずだ。
それでも天災は起こるだろう。起こる災難に対し「どうふるまったか」という事柄は、これからの自分の歴史に記すことはできる。
歴史上、困っている人に手を差し伸べ、社会貢献を果たした功労者の名前は燦然（さんぜん）と輝いている事実がある。
ロマンを必要としない、永遠に不変なものはある。

ご支援ご協力について

私達、幡ヶ谷再生大学復興再生部は音楽やスポーツを通じて繋がった仲間達、そして皆様のご協力のもと、長期的かつ継続的な復興支援を行なっていくことができます。現時点、当団体は専任のスタッフを雇用しておらずボランティアによる、少人数での運営となっております。そのなかであくまでも現地の連携を直接的にすること、個人、団体、自治体に関わらず、私達の力を必要とする場所へ確実な復興支援を目指していきます。随時、人手募集や物資の募集も行います。また皆さまよりご支援頂いた物資や支援金は当団体が責任を持って復興のために使わせて頂きます。

Text: 山口 努　三浦 望　Edit: 高橋 ケン　Design: 栗山 紗季(uri)